

# 小<sup>こ</sup>暮<sup>ぐれ</sup>北<sup>きた</sup>受<sup>うけ</sup>地<sup>ち</sup>遺跡

寺院建立に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

群馬県富士見村遺跡調査会

## 序 文

美しい山容で知られる赤城山の南西麓に位置する富士見村も、近年徐々にその様相が変化しています。山頂を含む村域を持ちながら、緩やかな山裾に立地することから、恵まれた農地の確保が可能だった本村南部も、周辺から押し寄せる開発の余波に影響され、工業団地造成をはじめとし各種公共開発が行われ、さらに宅地開発や大規模店舗建設等のさまざまな民間開発が行われてきています。

今回の発掘調査は、寺院の移転建立に先だって実施されたもので、その結果縄文時代の陥し穴をはじめ土坑や竪穴状遺構、古墳そして中世の城館跡などの極めて貴重な遺構が調査され、富士見村の歴史解明に新たな資料を加えることができました。

大きな話題となった考古学のニュースにより、発掘調査そのものが人気を博するような昨今ですが、地道な調査の結果が地域の歴史に新たな事項を加えることもまた大切なものと思います。しかし、このような調査によって、かけがえのない遺跡が破壊されるという矛盾した課題に直面していることも忘れてはなりません。

終わりに、発掘調査に際し惜しめない協力をいただいた関係者の皆様や、調査に従事していただいた方々に心より感謝いたします。

平成10年3月

富士見村遺跡調査会

会 長 浅 井 多津男

## 例 言

- 1 本報告書は、都市計画法第29条の規定する民間開発行為（寺院建立）に伴う小暮北受地遺跡発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地 群馬県勢多郡富士見村小暮北受地2525番地外
- 3 調査は、富士見村遺跡調査会（会長浅井多津男）の指導のもとに、スナガ環境測設株式会社（代表取締役須永眞弘）が実施した。  
調査担当者 羽鳥政彦（富士見村教育委員会）  
新保一美（スナガ環境測設株式会社）
- 4 調査期間 平成9年12月3日～平成10年3月31日  
整理期間 平成10年4月1日～平成10年5月29日
- 5 調査面積 5,560㎡
- 6 出土遺物は富士見村教育委員会が保管する。
- 7 測量・調査計画…須永眞弘、調査担当…新保一美、測量・実測…板垣宏・勝田貞幸・佐々木智恵子・石川サワ子・石田みよ子・桑島英彰、写真撮影…板垣宏・勝田貞幸、安全管理・表土掘削…都丸保男、作業事務…柴崎信江が担当した。
- 8 本書は、調査会の指導のもと、スナガ環境測設株式会社が作成に当たり、原稿執筆…新保一美、編集…須永眞弘、校正…金子正人・荻野博巳、実測図作成・整理…板垣宏・勝田貞幸、遺物洗浄・注記・復元…新保一美・柴崎信江・石川サワ子・内山恵美子・都丸藤子、遺物実測…佐々木智恵子、内業事務…須永豊が担当した。
- 9 調査に参加した方々（敬称略）  
飯島いし 石川サワ子 石田松美 石田みよ子 今井つる 内山恵美子 狩野宮子 木島勇吉  
桑島英彰 高坂なみ 高坂やすの 小林ひろ 斉藤まき子 斉藤ミヨ子 佐々木智恵子 新保勝太郎  
新保松乃 高橋あき 都丸藤子 中川住一 中野鶴市 根井よし子

## 凡 例

- 1 遺跡の位置の基準  
基準点 国土地理院の三角点および水準点 座標系 第IX系  
I A・0点座標値 X 50,360.000m Y -64,320.000m  
水準点 BM.1 310.00m BM.2 311.00m BM.3 314.50m BM.4 317.00m
- 2 遺跡の位置図  
国土地理院発行2万5千分の1「渋川」を加筆して使用した。
- 3 実測図の縮尺  
遺跡平面図 S = 1 : 500（全体図）  
遺構実測図 S = 1 : 60を原則とした。  
遺物実測図 S = 1 : 3を原則とした。  
上記以外の縮尺を使用したときは、その都度表示した。

4 遺構の略号は次のとおりである。

竪穴状遺構=J 陥し穴=T 土坑=D 古墳=M 溝・堀=W 地下式土坑=C  
ピット=P (ただし数字のみで表記したものもある)

5 土層断面の土色および土器類の色調名は「新版標準土色帖」(財団法人 日本色彩研究所 色票監修)による。

## 目 次

序 文
例 言
凡 例
目 次

I 発掘調査の経緯	1
1 発掘調査に至る経緯	1
2 発掘調査の経過	1
II 発掘調査の概要	1
1 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
2 基本土層	3
3 調査の方法	4
III 検出された遺構と遺物	4
1 旧石器時代(トレンチ調査)	4
2 縄文時代の遺構と遺物	4
(1) 陥し穴	4
(2) 竪穴状遺構	5
3 古墳時代の遺構と遺物	5
1号古墳	5
4 中世の遺構と遺物	6
(1) 溝・堀	7
(2) 1号地下式土坑	8
(3) 2号地下式土坑	9
(4) 墓 坑	9
5 その他の遺構と遺物	9
(1) 土坑・ピット	9
(2) 倒木痕跡	10
(3) その他の遺物	10
ま と め	10

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………2	第10図	W-1平面・断面図……………23
第2図	標準堆積土層図……………3	第11図	W-1、土坑、ピット断面図……………24
第3図	T-1～T-6遺構 平面・縦断面図・断面図……………16	第12図	W-2平面・断面図……………25
第4図	T-7～T-12遺構 平面・縦断面図・断面図……………17	第13図	W-2、土坑断面図……………26
第5図	T-13～T-18遺構 平面・縦断面図・断面図……………18	第14図	W-3平面・断面、ピット断面図……………27
第6図	T-19～T-24遺構平面・縦断面図……………19	第15図	W-4平面・縦断面図……………28
第7図	竪穴状遺構平面・断面図、 ピット断面図……………20	第16図	W-4断面図……………29
第8図	古墳平面・周堀断面図……………21	第17図	1号地地下式土坑平面・断面図……………30
第9図	石室平面・展開図・断面図……………22	第18図	2号地地下式土坑平面・断面図……………31
		第19図	土坑(墓坑)平面・断面図……………32
		第20図	遺物実測図-1……………33
		第21図	遺物実測図-2……………34
		付 図	遺跡全体平面図

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡とその概要……………2	第3表	土坑・ピット計測表……………15
第2表	陥し穴・ピット計測表……………14		

## 写真図版目次

図版1	遺跡全景 1～5号陥し穴完掘 6号陥し穴半截地断	W-2 屈曲部 W-2 地断
図版2	7号陥し穴半截地断 8～14号陥し穴完掘	W-3 完掘 18号土坑完掘
図版3	15号陥し穴半截地断 16～20号陥し穴完掘 18号陥し穴逆茂木痕 7号土坑完掘	W-4 全景 W-4 西半部
図版4	8・9・11・12号土坑完掘 竪穴状遺構 古墳石室全景 玄室残存状況 主体部掘り方	図版6 1号地地下式土坑入り口部 1号地地下式土坑内部構造 1号地地下式土坑完掘 2号地地下式土坑確認面 2号地地下式土坑内部構造 2号地地下式土坑底面状況 2号地地下式土坑入り口部 21号土坑完掘
図版5	W-1 全景 W-1 中央部地断	図版7 天目茶碗・香炉・茶臼・播鉢・石鉢・土鍋
		図版8 灯明皿・坏・砥石・羽口・火輪・刀子・その他

## I 発掘調査の経緯

### 1 発掘調査に至る経緯

平成9年2月、天台宗明開寺より村教育委員会に対して大字小暮の寺院の移転建立予定地内での埋蔵文化財の有無について確認問い合わせがあった。これに対し、村教育委員会では、開発予定地内は周知の遺跡として認識されていないが、近年発掘調査された周辺の遺跡等からの資料結果によると、遺跡が存在する可能性が高いため、試掘調査を実施する必要がある、その結果を判断する旨回答した。

平成9年8月から9月にかけて試掘調査を実施したところ、縄文時代に帰属すると思われる遺構や古墳、中世の城館跡などの遺構が検出・確認された。

平成9年11月、以上の結果に基づき、明開寺との間で埋蔵文化財の保護・保存について協議を行ったが、当初計画を変更することは困難であることから、やむを得ず掘削の及ばない部分を盛り土保存し、一部の発掘調査を実施して、記録保存を行うこととなった。さらに、調査の進展により重要な遺構等が発見された場合には、改めて協議することで合意した。

### 2 発掘調査の経過

平成9年12月3日に資材を搬入し、ただちに既存のトレンチの埋め戻しおよび抜根されていた雑木の処理に着手した。同9日、工事計画等の都合により、調査区南端から表土掘削を開始した。同27日、古墳と大堀の位置する中央部に着手。平成10年1月13日、北端部の表土剥ぎを開始した。

大堀とその北側部分は最後まで併行した精査が続いたが、3月5日には空中撮影を行った。その後逆茂木痕の精査を続行し、23日から旧石器のトレンチ調査を始めた。同26日、村教育委員会による完了検査を受け、翌27日に全ての調査作業を終了した。

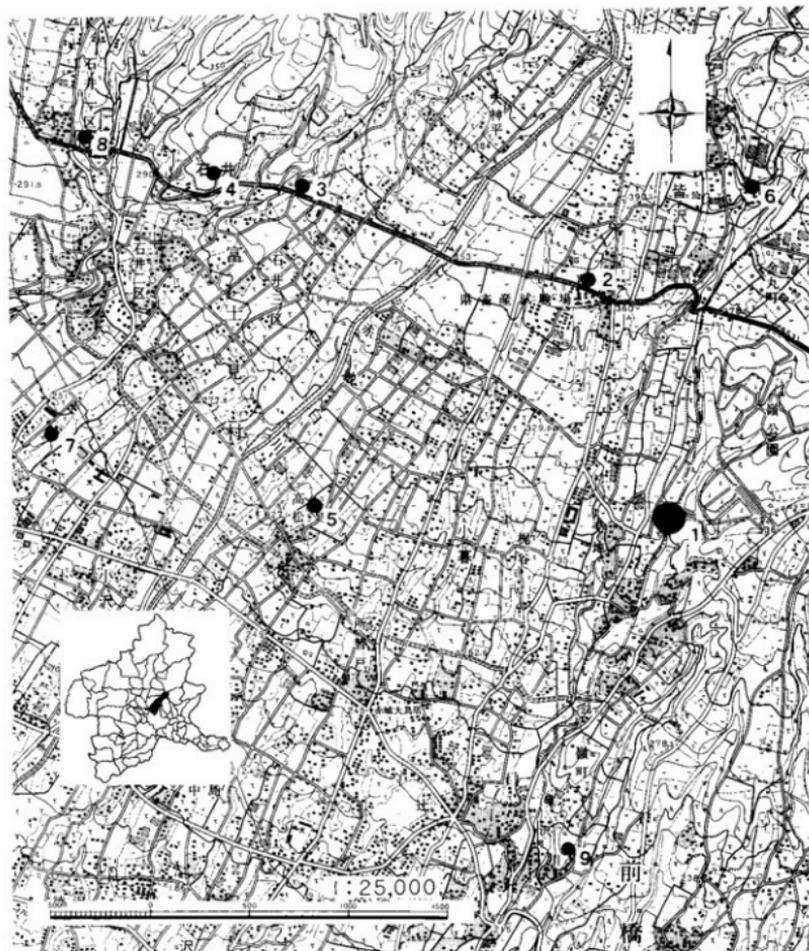
## II 発掘調査の概要

### 1 遺跡の位置と周辺の遺跡

群馬県勢多郡富士見村は、赤城山の南西麓から山頂にまで及ぶ長く広大な村域を持ち、県庁所在地である前橋市の北端部に接する。東方は大胡町・富城村、西方に北嶺村・赤城村、北方は利根村に接する。標高450m前後の傾斜変換点から上は山岳地の様相を見せるようになるが、それ以下の村域南部は広大な裾野の緩傾斜地上にある。この部分は、隣接する前橋市を含めての火山性扇状地である白川扇状地とその西側の開析谷が良く発達した丘陵性の台地とに大きく二分できる。

本遺跡は、白川扇状地の東側、南北に長く伸びる舌状台地のほぼ南端に立地し、標高308～317m程の範囲

## II 発掘調査の概要



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡とその概要

	遺跡名	主な遺構	遺構の時代		遺跡名	主な遺構	遺構の時代
1	小暮北受地遺跡	本遺跡		6	皆沢城址	城館址	戦国時代
2	小暮東新地遺跡	陥し穴等	縄文時代ほか	7	新井館址	館址	戦国時代
3	石井柴山遺跡	陥し穴等	縄文時代ほか	8	岡城址	城館址	戦国時代
4	坂上遺跡	陥し穴等	縄文時代ほか	9	嶺城址	城館址	戦国時代
5	茶釜屋敷	館址	室町時代				

に分布している。遺跡北側には、国道353号線が走り、すでに発掘調査された結果から判断すると、この国道沿いの一帯に縄文時代の陥し穴遺構を含むいくつかの遺跡が存在することが判明しており、標高310m前後から370m前後の範囲に分布することが確認されている。

縄文時代では、本遺跡北北西約1.2kmの小暮東新地遺跡（第1図2）、同約3kmには西大河原遺跡が、さらに北西側2.5kmの石井柴山遺跡（同図3）また同2.8kmの板上遺跡（同図4）があり、標高490m前後を示す西大河原遺跡を除いて、国道沿線が狩猟地帯であったことをよく証明していると言えよう。（石井柴山遺跡調査報告書）

古墳時代では、周辺の調査例が乏しいことから未だ明確にはされていないが、表面調査の結果、本遺跡に接する北側25mに1基、さらに125m程離れた北方の前橋市分にもう1基の上毛古墳総覧記載漏れの墳丘が、ともに石組みを露出して確認できる。また、富士見村誌によれば、小暮地内には古墳総覧に載る古墳2基と、村誌編集時に調査確認された2基の計4基が記されている。

城館址は本村だけでも十指に余り、大字小暮地内の茶釜屋敷（同図5）、同皆沢の皆沢城（同図6）、同時沢の不動城、同田島の田島城、同新井館（同図7）などが存在し、同石井の岡城（同図8）、同原之郷の金山

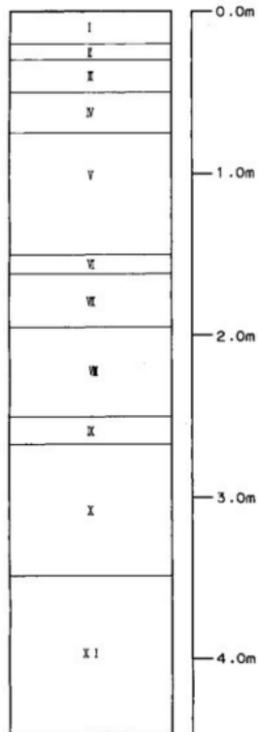
城、同漆窪の漆窪城、同引田の森山（引田）城、同横室の横室寄居、同米野の丸山城と列挙され、中世における赤城南麓の重要性が認識できる好資料を供しているといえよう。（富士見村誌）

## 2 基本土層

調査区現状は、大きく三段に削平されており、中央部と南端部を含むIII区では、表土である耕作土の下20cm程でハードローム面が現れる。したがって、ここではI・II区の部分を指標として標準層位としている。また、ハードローム面以下は旧石器確認調査の事前準備としてW-4の側面部分から採り、これを合成している。

表層下40cm前後には二次堆積のローム土があるが、ローム上層が水平でなく、いつの時代に動かされたものかは不明である。

### 基本層序



第2図 標準堆積土層図

- I 耕作土
- II 暗灰褐色中締中粘細砂 炭化物・焼土粒含む
- III 灰黄色中締中粘細砂ローム
- IV 暗褐色弱締弱粘細砂 灰黄色水性斑状紋30%含む
- V 褐色ローム層 YP・白色軽石含む
- VI 青灰色中締粘粗砂ローム YP 7%・スコリア含む
- VII 濃い褐色中締弱粘粗砂ローム BP 純層・スコリア混入
- VIII 褐色中締中粘細砂ローム 灰色軽石・青灰色軽石(10mmφ)・褐色軽石混入
- IX 暗褐色中締弱粘粗砂ローム 暗色帯
- X 褐色高締中粘細砂ローム 青灰色軽石・褐色軽石含む
- XI 榛名八崎軽石層

YP: 浅間一板鼻黄色軽石層 BP: 浅間一板鼻褐色軽石層

### 3 調査の方法

本調査は掘削が及ぶ範囲と、重要と思われる所に限定された部分調査であり、その他は盛り土保存を原則としたものである。教育委員会による試掘調査トレンチが開削しており、これを指標として重機による表土剥ぎを行った。いずれも、遺構確認のできる面まで重機による剥ぎ取りを行った結果、その全てでローム面に達する結果となった。

縄文時代陥し穴の逆茂木については、時間的制約の下での調査となったため、全ての断り割確認をするに至らなかった。城館址の堀については、全面に亘ってその底部まで人力による精査を行った。

調査区は、公共座標に基づき100m四方でⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区に分けた。グリッドは、北西隅を基準(IA-0 X 50360.00 Y -64320.00)に東西ラインを算用数字、南北ラインにアルファベットをあてて4m毎に設定した。また水準は、公共水準点に基づき調査区内に4ヶ所(BM.1 H=310.00m、BM.2 H=311.00m、BM.3 H=314.50m、BM.4 H=317.00m)測設した。

## III 検出された遺構と遺物

### 1 旧石器時代(トレンチ調査)

調査区北部分の、ⅠX-13グリッド・ⅡA-16グリッド・ⅡB-18グリッドから北東方向に25m程の長さで、浅間一板鼻黄色軽石層・浅間一白糸軽石層・浅間一板鼻褐色軽石層の各面で確認調査を実施した。さらに調査区北端に近い部分のⅠM-20グリッドから東方向へ37m、暗色帯を掘り下げる面までの精査を実施した。いずれのトレンチにおいても石片すら検出されない状況であった。

### 2 縄文時代の遺構と遺物

#### (1) 陥し穴(挿図第3・4・5・6図 表第2表)

**遺 構** 調査区北側のⅠ・Ⅱ区を中心に検出されている。削平等を受けていなければ、調査区全域にわたってより濃密な検出が可能であったと推定される。

今回の調査では24基の陥し穴が検出された。そのうち、逆茂木と明確に判断できるものは約半数の12基を数え、他に1本のみ確認できたものが2基ある。これらのうち、3穴と判断できるものは、T-1、T-4、T-13、T-14、T-20の5基である。また、2穴のものはT-2、T-3、T-5、T-9、T-11、T-17、T-19の7基で、さらにT-7、T-18は1穴のみが確認されている。逆茂木痕が検出されなかったのは、T-8、T-10、T-12、T-16、T-21、T-23の6基である。

**遺 物** T-13、T-14、T-19の陥し穴から、縄文時代前期所産と思われる土器片等が散見される。T-14

からは石匙(遺物番号5)が出土。他にX-15グリッドから遺物番号3の石鐮、Y-16グリッドからは遺物番号4の石鐮が出土している。

**考察** T-18は確認面では小判型を示しているが、底面が「く」の字状を呈している。屈曲位置から北側と南側の底面レベル差は18cmあり、重複の可能性も否定できないが、北側部分が延長して壁面に当たったとしても、その長さは80cm余であり、この寸法は本跡では全く類例を見ない。南側部分の計測結果も同様である。したがって、ここでは単独の遺構として図示しておく。

逆茂木は北側部分に1穴のみ確認できた。同心円状に二段に掘られ、外径20cm・内径7cmで深さはそれぞれ18cm・11cmを測る。内側の形状は角形を呈する。

本遺跡での陥し穴の形状は、全体的に狭長で、中央部が幾分くびれた鼓のような形状を呈する特徴が見られる。時間的な問題から、逆茂木の断ち割については十分な配慮ができなかったが、T-6、T-7、T-15の全体断ち割の結果から類推すると、逆茂木のそれぞれの埋め込み深度は44cmと74cm、径も10cmと18cmを測り、想像以上に深く、しっかりとしたものであった。

## (2) 竪穴状遺構 (挿図第7図)

**遺構** 調査区IR-13グリッドに位置し、南北2.25m、東西2.21mを測る方形のプラン。竪穴で平坦な床面で、ハードルーム面まで穿って、窪みに黒褐色粘質土を貼って床面を構築したと思われる。

周溝が全周し、幅は底面の平均で6cmを測る。

プラン中央に径15cm、深さ32cmの主柱穴とおぼしきピットを検出した。プラン外周部の精査を行った結果、径20cm・深さ38cm、径22cm・深さ22cm、径21cm・深さ24cmの3基のピットを検出したが、その配列が三角形となり、竪穴状遺構と結びつくか否かは判然としないものがある。

**炉址** 主柱穴北側に床面と同一平面上に、南北40cm・東西42cmの範囲に焼土を検出した。ほぼ中央の最深部で10cmを測る。微粒の炭化物・灰を検出。北側部分には多数の焼け石が出土している。

**遺物** 焼土中から黒曜石が、覆土中からは細かい沈線による条痕文のある土器片を検出した。

**考察** 住居址としては小振りなプランである。外縁に3ヶ所のピットを検出したが、調査段階では本址に付随する柱穴となるか否かの判断はできなかった。

## 3 古墳時代の遺構と遺物

### 1号古墳 (挿図第8・9図)

**位置** II A-17グリッドに位置する。標高は石室床面で313m前後を測る。

**墳丘** 主体部奥壁の北側が一段高い畑地となっているが、すでに削平されている。主体部も削平され、畑地となっている。

**周堀** 北側の半周部分が残存する。北東および北西側が途切れている。石室北側に底部のみを残して確認され、その前面は一段下がつて削平されているため、その痕跡をとどめない。

**規模** 東西長18.4m(推定値)、南北長11.7m(残存値)の円墳と思われ、羨道部分から前は耕作などによる攪乱のため明確にし得ない。東側周堀は上幅3.1m・下幅0.8m・深さ0.36mを測り、玄室奥壁の根石と思われる石が存在する。北側は上幅2m・下幅0.8m・深さ0.37m、北西部分の周堀は、縄

### III 検出された遺構と遺物

文時代の陥し穴や最近の攪乱などにより、明確な形状は認識できないが、推定で上幅2.2m・下幅0.8m・深さ0.42mである。

**主体部** 南西方向N-161°-Wに開口する横穴式石室である。石室はYPを混入するハードローム面まで掘り込み、黒色粘質土を貼り、割石を敷き詰めた床面を構築している。掘り込み寸法は、横幅4m、縦幅は残存値で4m、比較的裏込め幅の狭い造りである。東壁は根石とその上段の石が残っていた。他は攪乱のため虫食い状に根石が残っている状態で、特に西壁は損壊が著しかった。羨道部分は敷石の大半が剥ぎ取られ、左右両端とおぼしき位置にわずかに列をなして残っていた。このことから両袖型の可能性を示すものと判断した。敷石は玄室・羨道ともに縦20cm・横15cm前後の自然石の割石を敷き詰めてあったものと思われる。

**玄室** 奥壁は左右の2石が残り、東壁は根石4石でその上に3石が残り、西壁は傾いた1石とその南側の1石、合わせて2石のみが残り、裏込め石が滑り出した状態であった。前壁から羨道にかけては、わずかな根石跡が確認できるのみであった。根石跡の寸法はそれぞれ、奥壁の85cm幅、西壁は22cm幅2石と13cm幅1石の計3石が確認されたが、他は不明確であった。

裏込めは44～65cm幅で、玄室部を取り巻く状況が確認された。

玄室の平面形は根石跡から判断して、両袖型と見なされる。石室各部の計測値は、石室長270cm、玄室長225cm、玄室奥幅190（推定）cm・玄室前幅180（推定）cmを測る。やや方形に近い形状である。羨道部については攪乱が著しく、明確にすることができない。

**遺物** 石室内床面より刀子片（茎部を含む）、同フルイ土から刀子片（刃部）が出土、接合後一体となったもの（遺物番号9）と刀子の刃先（遺物番号8）が石室内から出土。また周堀内の陥し穴からも刀子片と思われるものが1点出土している。柄部に木質が付着している（遺物番号6）。

**備考** 墳丘部は著しく削平され、わずかに周堀の底部が残されている状況であった。そのため全体図に反映する形状もやや歪んだ形を示している。また、西側の周堀は縄文時代の陥し穴や、植栽による土層の乱れが広がっており、明確さに欠ける嫌いがある。

石室の奥壁裏込め部分から、一段下がった削平がなされており、調査以前に、石室に利用したと思われる石が、この段差の法面に貼られる状態で確認された。

**考察** 本古墳は上毛古墳総覧及び富士見村誌に記載されていないものである。周辺には既述のとおり古墳の存在が窺われる。著しく削平を受けているため、周堀の前半分は全く確認できない状態であった。石室主体部も根石部分がかろうじて残されている状況であった。表土下20cm以下での残存であり、農耕に際して邪魔な石はことごとく移動されたものと思われる。東北側の周堀内に残された石も、その寸法は奥壁の根石跡の寸法と一致する事を確認した。また北側の大堀東端部からは大量の石が埋められていたことから、このことが窺われる。

## 4 中世の遺構と遺物

本遺構の位置はその大半が盛り土保存となるため、掘削が予定されている部分のみの調査を主とした。したがって城館址に付随する礎石跡や構築物に関する明確な遺構は調査範囲では検出されなかった。しかしながら大堀を初めとして、郭を構成するであろう区画溝の精査を実施することができ、また試掘調査結果を重ね合わせる事によって、おぼろげながらその全貌をかいま見ることが可能となった感がある。

## (1) 溝・堀

## W-1 (挿図第10・11図)

**遺 構** 調査区最南端のIII U-10グリッドに位置する。長さ19m・上幅2m・下幅0.67m・深さ1.23mの箱堀で、西端は途切れている。東端はそのまま東の崖に抜けるものと思われる。堀の北側肩部分にかかるD-28は、陥し穴である可能性が高いが、著しい攪乱を受けていたため土坑とする。

**遺 物** 溝内からは内面底部が摩耗により平滑化し、底部に近いところに四角形状の穿孔がある鉢状の石製品（遺物番号20）が出土。遺物番号10の播鉢や遺物番号13～15の軟質陶器の坏。浅間軽石を利用した茶臼の上臼部（ふくみが見られることから上臼と判断）の断片（遺物番号19）、口端部から底部近くにかけての土鍋（内耳の部分は未検出）の断片（遺物番号16）の他、遺物番号17・18に代表される内耳鍋の破片30点余を検出。遺物番号23の砥石等の他、溝上端からは五輪塔の火輪（遺物番号21）が逆さになった状態で出土。また多量の熱を受けて赤変し、鉄錆が付着した平板な金床石のような安山岩断片も検出された。

D-28からは石匙が出土している。

## W-2 (挿図第12・13図)

**遺 構** W-1の北側III P-11グリッドに位置し、規模はW-1に近く、上幅2.25m・下幅0.6m・深さ0.8mを測る。形状はV字形の薬研堀であり、南端部は途切れるものと推定される。南北走行し、III N-12グリッドで鉤の手に曲がり、極端に狭く浅い形状となる。上幅1.2m・下幅0.5m・深さ0.55mを測る箱堀で、W-1同様東側に抜けるものと思われる。

**遺 物** 東西走行中央部のトレンチから、顕著な二次焼成を受けた灯明皿片（遺物番号12）と羽口片（遺物番号24）が出土している他、小片の土師器片を検出。

## W-3 (挿図第14図)

**遺 構** 調査区西端のIII H-6グリッドにあり、50cm余の段差が始まる位置にある。つまり本来の深さなのかどうかについては、段切りの時期が不明なため、判断に窮する所である。現状での規模は極端に浅く小さくなり、西端から15mの辺りから約120°の角度で北東側に折れる。さらにそこから東へ約12m離れた地点には、この溝を180°回転したような配置の溝が試掘調査で確認されている。この部分は俯瞰的に見ると、W-1とW-2に区画された郭との連郭構造が読みとれる。また、試掘調査で確認された溝と本溝跡とは対角をなすものとなる。

**遺 物** 流れ込みと思われる土師片2点が出土。

## W-4 (挿図第15・16図)

**遺 構** 調査区の東西一杯に延び、全長70m。上幅8m・深さ4m・底部幅0.25mの大堀である。典型的な薬研堀の形状を残し、底部は中央部から東西に向かって下がっており、目視印象では平面形状が幾分南に向かって弧をなしている。東端は、現状でも谷側面に本址の形状を留めている。

**遺 物** 内耳鍋の小片2点、常滑壺片1点を堀底部から検出。

### Ⅲ 検出された遺構と遺物

#### 小 結

W-1は西端部で途切れており、そこから北側に南北に延びるW-2があり、この部分が虎口になるものと思われる。W-2はIII N-12グリッド内で東に向きを変え、急激に狭く浅い形状へと変化する。東端部に南北走行の溝が確認できないことから、W-1・2ともに東側の谷側面に落ち込むものと考えられる。コの字状に廻っていることから、この区画された内部が一郭を形成するものと考えられる。

W-3は東端部で隅切りの形状を示し、そこから北に延びるものと想像される。前述したように、その東側にこのW-3を180°点対称にしたような溝が確認されている。その隅切りは南西に向かった虎口となるものと考えられ、さらにその前方に幅広い溝が認められているが、虎口正面に備えられたこの溝の内側を含めて考えれば、枡形虎口となることも想像される。別の観点からすればW-2北側の郭の虎口は、W-1とW-2に区画された郭の虎口同様、西向き配置になるものと思われる。さらにこの北側の郭の南西向き虎口とが一箇所に集中する欠点を補うために、南西虎口の前面にやや幅広い堀を備えたと見ることもできよう。

乏しい資料からの類推であるが、W-1から北に二郭の連郭を推定でき、その北側にW-3に区画される郭と並郭的にさらに一郭が存在したことが考えられる。

W-4の大堀は平均で上幅8m・深さ4mを測り、下部は急激に箱状に掘り下げたもので狭隘な薬研堀としての形状を呈する。箱状部分の値は、下幅0.25m・高さ0.5mを測り、上端から1.4m下がった位置までは中程を内側に膨らませる急峻な形状となっている。その最も突出した部分の北側面には、幅20cm弱の犬走り様の平坦面が、中央やや西寄りから西端部に近い所まで続いていた。

概観すると、底面中央部が高く、東西各方向に緩やかな傾斜を持ち、全体的には幾分南方向に弓状の湾曲を見せている。東端は台地側面に現状でも落ち込みが確認できる。西端は村道に阻まれ、台地側面では落ち込みの確認はできなかったが、これもまっすぐに延長するものと考えられる。

既述のとおり溝1・4ともに内耳鍋の破片が多量に出土、接合の結果1点は残存高約15cmを測る。その他摺鉢の底部破片、多孔質安山岩を利用した鉢状の石製品なども出土している。また底部から緩やかに外反する体部を持つ軟質陶器の坏、砥石などがW-1から出土している。石臼（石鉢）と摺鉢の使い分けが行われた時期と見ることができ、内耳鍋の圧倒的普及直後の年代と比定できるものと思われる。

#### (2) 1号地下式土坑（挿図第17図）

**遺 構** III R-8グリッドに位置し、すでに開口していた。農耕作業中に耕耘機がはまり込み、埋め土がなされていたが内部構造等に損壊はなかった。ローム上面から底面までの深さは1.7m、天井部までの深さは0.9m、底面の長さ2.15m×1.65m、天井部の長さ1.93m×1.65mを測る。構造的にローム天井部をドーム型に残せば、強度が増し、天井の陥没が防げるものと見なされるが、開口時間が長かったため、自然崩落が認められ、完全なドーム型の確認には至らなかった。

入り口は、主体部の東壁南端に近いところに竪穴状に彫り込まれ、主体部側はアーチ状に穿たれ、上から43cmの位置に入り口方向へ向かって庇状にローム地山を掘り残し、両側面は柱状に入り口部に向かって張り出していた。入り口から主室を望んだときに、壁面左右に柱が密着し、その上にアーチ状の梁が乗る形状にローム地山を掘り残していたが、調査中に崩落してしまった。入り口部は意図的に埋められたと考えられ、浅間軽石を使用した宝塔の丸い屋蓋状のものが出土している。他に、一抱えほどを最大とする石が砂質土に混じって数点検出された。これらの石は安山岩でその一部に火を受けた痕跡が認められた。また、主室床面に台石状の安山岩が検出された。

- 遺物** 入り口部分の底上に、灯明皿（遺物番号11）が出土した。すずが付着した状態がわずかながら認められ、上向き状態の発見であることから、出土位置での使用とみなすこともできる。前述の浅間軽石による屋蓋状に削りだされた石製品（遺物番号22）の破片2点は接合された。底面は円形に削り取られているが宝塔の屋蓋とするには外形が定まらない。むしろ大型の蔵骨器の蓋と考える方が妥当な感がある。
- 考察** 主室と入り口に分けられた造りで、入り口部分に石が混在し、意図的に封じられた状態であること。石の多くに焼け跡が確認されたこと。灯明皿が検出されたこと。入り口と主室の境界面が飾り縁で施されたアーチ型を呈することなどから特別の目的で作られたものと思われる。

## (3) 2号地下式土坑（挿図第18図）

- 遺構** III M-18グリッド内に位置し、ローム上面から底面までの深さは1.9m、天井部までの深さは1m、底面の長さ2.6m×2m（入り口幅0.5mを含む）、天井部の長さ2.5m×1.5mを測る。ローム天井部はドーム型の形状を思わせる計測結果がでている。

入り口は1号土坑と異なり、主体部との境界部が逸失しており、その規模・形状については不明確であったが、入り口から鉛直方向の床面に円状の掘り込みが認められることから、これを入り口の径とした。

- 遺物** 土師器の小片（1cm<sup>2</sup>弱）が検出されたのみ。

- 考察** 試掘調査時に重機が落ち込んだことから、偶然発見されたものである。被破壊面は西壁とそこに連なる入り口部分と天井の内面の崩落におよんだ。したがって新しい発見にも関わらず、1号土坑よりも資料に欠ける結果となった。

## (4) 墓坑（21号土坑）（挿図第19図）

- 遺構** III L-21グリッド内に位置し、試掘調査時に天目茶碗と香炉が検出された。長方形で南北方向に長軸を持つ。南北2.86m・東西1.28m・深さ0.28mを測る。また、この土坑の南側には1.4m×0.64mの小土坑（D-22）があるが、遺物の検出は認められず、その用途・目的ははっきりしない。北方の20号土坑は攪乱状の覆土である。

- 遺物** 天目茶碗（遺物番号1）と香炉（遺物番号2）の2点の他は土師器片が出土するのみ。

## 5 その他の遺構と遺物

## (1) 土坑・ピット（挿図第7・11・13図 表第2・3表）

- 遺構** ピットに関しては検出面で確認されたもの全てについて半載処理後発掘したものを選別した。I・II区のものにはPの略号を用いず数字のみで示し、III区のものにはPを付けて分けている。時代区分については出土資料に欠け、明確にはできなかった。（別表参照）土坑についてもその殆どが、時期・目的・用途に関して不明確のままである。

- 遺物** D-7、D-9、D-12からは縄文時代の遺物が出土。ピットからは遺物の検出は見られなかった。

- 考察** I区のピット類は、西寄りに検出された配列がT-1に向かってハの字状になっていることが認めら

### Ⅲ 検出された遺構と遺物

れる。東寄りのⅡ区から検出されたピットは数が少なく、配列の確認には至らなかったが、T-3の北側に検出された13は深さ71cmを測り、堅固な造りとなっている。いずれも陥し穴への追込み用柵列を思わせるものがある。

#### (2) 倒木痕跡

**遺 構** I・Ⅱ区から14基の倒木痕を検出した。

**遺 物** 4、12、13号の倒木痕からは縄文時代土器片が検出されている。うち13号の覆土からは縄文時代中期とみなされる浅鉢の破片が出土している。

10号倒木痕からは、平安時代の坏の小片が出土している。

#### (3) その他の遺物

古墳石室東側から出土した遺物番号26は銅製品であるが、その名称・用途は不明である。八角形の管状で、一端は折り返されて小穴が開き、他端は内径のまま開いている。あるいは根付けの一種とも考えられる。K-22グリッドからは遺物番号18の平板状金具が出土するが、これも名称・用途については不明である。また、I区一括として角釘断片が出土している。

## ま と め

本遺跡で検出された縄文時代の陥し穴は、狭長と言う言葉が似つかわしいほど、幅の狭い印象を受ける。これはそう遠くない遺跡地での陥し穴とも異なることから、地域差の問題の他に狩猟対象の動物が異なる可能性も考えられるのではないだろうか。例えば、四肢のうちの一肢がはまり込めば、身動きがとれなくなるような動物類の場合はこの形態で充分と言えるであろう。

等高線に対する敷設角度の問題も、このように多角的に考えることができるのではなからうか。ただし、近接した遺跡地での比較において、極端な相違が認められる場合は視点を異にする必要があろう。同様に逆茂木形態についても様々な観点が考えられるものと思われる。

陥し穴の全てが同時期のものと考えことはむろんでできないが、T-1の南面は他に比べて陥し穴の配置が疎らな印象がある。ここにハの字状に配列されたピット群は、陥し穴への誘導を目的としたかの感がある。

堅穴状遺構については、その規模が小さく、それだけで住居として良いのか、また外縁のピットを含んで考えて良いのか結論付けられなかった。また、住居以外の監視小屋や作業場的な意味合いについても、その論拠とすべき類似遺構が他に検出されないため憶測の域を出ない状況であった。

古墳時代については周辺の調査事例が乏しいことから、今後の調査を待たざるを得ないが、この台地上に古墳が並ぶことは考えられる。本遺跡では、同時代の住居址の検出は見られなかったが、台地西側の緩やかに傾斜する一帯に、今後居住域や生産域が確認されることを期待するものである。

中世城館址については、伝承資料が皆無であり、発掘調査の結果からのみの考察である。したがって、論拠に乏しく、異論も生じるものとなることをおこわりしておく。

限定された本調査の結果からのみでは判断しにくいですが、試掘調査時の資料（全体平面図波線部分）を疊重する事によって、郭の並びが類推できる。郭の構成については前述が全てではなく、削平などによって欠失した部分もある可能性も考慮しなければならないものと思われる。

W-4の形状は、嶺城遺跡（前橋市教育委員会 平成5年度）における2トレンチから検出された、嶺城の北第2郭とその東側の帯郭の間の大堀（山崎一「古城皇址の研究」上巻）に近似している感がある。その堀は、上幅12m・深さ5.7m・下幅が0.24mと狭くV字状に立ち上がる葺研堀状のものであるという。本址もその規模をいささか小さくするものの、造作上は同一の企画に基づくものと判断してよからう。

またW-2の屈曲部からの極端な形状変化の例は、大室城の二の丸を囲む北の堀中央部から直角に延び、さらに東に曲がる堀とその形状を同じくする。

位置的には、南方約1.7kmに嶺城（第1図9）、北約1.7kmに皆沢城があり、西約1.8kmには茶釜屋敷が存在する。ほぼ等間隔の配列で、皆沢城と嶺城そして本跡の3城はほぼ南北に並ぶ配置となっている。

皆沢城は白井長尾系と目されている。嶺城は田中大弐（北条高広の臣）、大室城は牧弾正（長尾政景の臣）と城主名が判明している。それぞれ越後と白井の長尾に属する。このことから判断すると、築造法的には長尾系の造作を踏襲するものとみてよからう。

茶釜屋敷は齋寺為時の館であったと伝えられる。為時は新田氏に従軍し、不帰の人となつたとも言われる。本遺跡出土の土器片の編年感とこの伝承からすると、大きな時間的隔たりが生じる。為時討ち死に後、館が土民に略奪されたとすれば、その後も館として存続し続けた可能性は薄く、本城館址と丘城・平城の相関関係を見ることは不可能であろう。

本跡の構造については、いづれが主郭となるかの判断は現状では認識できないが、南端部の虎口から、熱を受けて赤変し、平坦で鉄錆が付着した金床石と思われる石の断片が検出されている。W-2の東西走行部分は底部に鉄錆が多い。ほぼ同レベルでの土層の錆化は見られず、溝底部から礫羽目を検出しているなど、武器の修繕に関わる鍛冶工房が付随したことが考えられる。

地下式土坑については、今まで赤城南麓を中心に検出例が見られるが、その用途・目的については全く不明であると言っても良からう。多くは入り口部の完郭中に隣接する主室を見つけることから確認されることとなるが、本跡では偶然の結果から主室がまず確認されたものである。

類例は芳賀東部団地I遺跡群（前橋市教育委員会 '76~'80）、西大室遺跡群（前橋市教育委員会 '82）、下東西遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団 '87）などがある。このうち西大室遺跡群では、階段状の入り口が主室の東壁南端部につき、東壁中央部が基壇状に張り出し、その上に人頭骨が乗っていた。他の骨は全く検出されない状態であったが、これは墓坑の一種であるとしなして良からう。

本遺跡の地下式土坑の用途についてであるが、貯蔵庫の性格であれば、入り口部は簡素な造りで充分である。また蓋のようなものを設けたほうが、より利便性が高いものと思われる。1号・2号ともに入り口部分が密閉された状況であり、密封状態での保存が必要なもの以外は考えられない。それにしても、入り口部分はより大きい径を要するものと思われる。

墓坑とすれば、飾り縁の付いた両側壁、アーチ形入り口や庇状の梁部とその上の灯明皿などから首肯できるものが多いが、入り口部は棺の通る径ではない。棺に入れずに埋葬するとしても、死後硬直した遺体が通過するには困難な程の大きさしかない。可能性があるのは焼骨の埋葬と言うことになる。寺の内遺跡（高崎市教育委員会 '79）で調査された中世墓坑では、炭化物や焼けた石が骨片とともに埋納されているという。別の場所で火葬処理をして、石や炭化物などと運び込んだものと判断している。この例からすると、本跡の入り口部の埋め土中に、焼けた石と微量の炭化物が混入していることが認められていることから、寺の内遺跡同様、他の場所で焼かれて炭化物などを含んで運ばれ、この場所に埋葬されたことも充分考えられる。主室内床面に存在する石は、焼骨を乗せるための台とも考えらる。しかしながら、主室内からは骨や

### III 検出された遺構と遺物

古銭などの遺物は全く検出されておらず、これも推論の域を出るものではない。

2号地下式土坑は試掘調査時に重機の重みで天井部と入り口部を損壊したことから確認されたもので、入り口部分の構造に関しては、その境界線すら全く不明となってしまった。床面に深さ24cm程の円形のプランが認められたことから、これを入り口の径と判断した。入り口部分と主室の仕切り部分は崩落していたが、入り口部のみ封じた形跡が、主室部の崩落土がロームであるのに対して、入り口部寄りの覆土が暗褐色の耕作土に類似した締まりの弱い土であったことから認められた。石や炭化物については確認できなかったが、床面精査中に微粒の炭化物と灰を検出している。しかしながら骨片や他の遺物とおぼしきものは、紛れ込みと思われる土師器の坏片(1cm平方程)が検出されたのみであった。

1・2号地下式土坑の主室天井部は、壁際のハードロームのみでも1m前後の厚さで掘り残されており、中央部に向かって上がっていく傾向を示している。このことは、構造的にみて荷重を分散することとなり、最も強固な形状であり、現今に至るまで天井陥没もなく存続し続けた大きな要因であったものと考えられる。

21号土坑として認識した墓坑については、天目茶碗と香炉を出土(試掘調査時)し、極めて貴重な遺物を出土しているものの、若干の問題点も生じている。すなわち墓坑としては浅すぎると言うことと、郭内に墓を造るかという疑問である。前者については、遺構確認面からするとその底面レベルが-30cm程であり、墓坑としては不適当なものとなる。したがって、墓坑造営時には現地表面よりも地表レベルが高かったと言わざるを得ない。後者については、試掘調査時点での溝の廻り具合から、当該箇所にて郭が存在する可能性が高いものとなる。城館築造時に段築造を施したものとすれば、その時点で墓が存在したことになる。出土遺物の観察からは、これは考えられない。城館築造後に墓を造ったとすれば、そこはもっとレベルの高い地形であったと言える。近代の土地改良等によって削平されたとすれば、W-1~3はより深い、幅広い形状であった可能性が生じることになる。

出土遺物の天目茶碗は広義の天目であり、建盞を示すものではない。特有な禾目がみられないこと、胎土が黒色でないことからの判断である。そのかわりに露胎部には鬼板による化粧掛けが施されている。施釉は鉄軸ズブがけで軸垂れによる段があり、段天目状を呈している。禾目はなく、くびれは明瞭で口端部は外反する。高台部はヘラによる削りだして、底裏中心に突起を持つ。高台脇は削りだしによるほぼ水平で直線的な稜を持つ。見込みは軸がすり減り、光沢を失って灰色に近い色合いに変色している。胎土は稠密で微粒の輝石が散見できる程度のみである。木節よりもモグサ土に近い趣がある。右回転のロクロ成形である。

香炉は筒形で、内外面ともに厚い灰釉が施され、軸だまり状の部分は緑色を呈している。外面には禾目が見られ、軸垂れによるものか、底裏のほぼ全面に薄く釉がまわる。底裏中央には径4cm弱の線状の削りだし高台のようなものが作り出されている。形態的には筒茶碗に近似していることから、転用品の可能性も考えられる。底裏端部に獣足が3脚つき輪トチンが部分的に残り、その痕跡も見られる。胴中央部にハルが見られ、ハルの中程に細い沈線が巡る。カエリと底部の側面にも、厚い施釉で隠されているが同様の沈線があり、都合3条の沈線が巡る。カエリは水平で、内側に張り出す。胎土は輝石を比較的多く含む稠密な白粘土と思われる。右回転のロクロ成形で胴中央まで挽き上げ、胴上半部とカエリ部分を接合した造りと見なされる。胴中央部のハルの部分とカエリの下端部には内面に接合痕が認められる。

私見が許されれば、両器とも美濃大窯のI期と目される。出土した摺鉢・火輪・土鍋などからも同年代の特徴が窺われ、墓坑と城館址はほぼ時を同じくするものと思われる。

発掘調査中に茶臼を確認した時にまずうかんだのは、茶釜屋敷と言う名称であり、そことの強い関連性を示唆するものと思いこんでしまった。しかしながら茶釜屋敷には伝承が残っており、それからすると本城館

址とは時間的隔たりがあり、直接関連するものではないと思われる。

本稿では敢えて私見に則し、文献資料・出土遺物を含めた資料に乏しい部分を補完したことを、おことわりしておく。

#### 参考文献

- 富士見村誌
- 石井柴山遺跡 富士見村教育委員会 '97
- 富士見遺跡群 富士見村教育委員会 '87
- 向吹張遺跡 田中遺跡
- 岩之下遺跡 寄居遺跡
- 小暮東新地遺跡 群馬県畜産試験場遺跡調査会 '96
- 群馬県古城壘址の研究 上巻 山崎 一著
- 大胡城跡保存管理計画書 大胡町教育委員会 '88
- 芳賀東部団地I遺跡群 前橋市教育委員会 '76~'80
- 下東西遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 '87
- 寺の内遺跡 高崎市教育委員会 '79
- 市内遺跡調査報告書 前橋市教育委員会 '93
- 高崎城三の丸遺跡 高崎市教育委員会 '94

III 検出された遺構と遺物

第2表 陥し穴・ピット計測表

番号	確認面規模		底面規模				長軸方位	深さ 深さ 深さ	逆茂木 配分	位置 グリッド	備考	
	長軸×短軸×深さ	長短比	長軸×短軸	長短比	最小幅	比						
1	258 132 83	1.95	221 68	3.25	68	3.25	N-24°-E	直	3	1-2-2	I C-21	土器片14 焼石10
2	208 104 124	2	188 54	3.48	48	3.92	N-58°-E	斜	2	1-2	II D-1	
3	232 72 96	3.22	212 38	5.58	36	5.89	N-18°-W	斜	2	2-1	II E-3	
4	236 102 85	2.31	204 60	3.4	52	3.92	N-41°-E	直	3	1-1-1	II H-0	
5	268 136 102	1.97	208 62	3.35	46	4.52	N-30°-E	直	2	1-1	II L-2	
6	240 152 164	1.58	164 52	3.15	40	4.1	N-41°-W	斜	(2)	1-1	II N-2	
7	252 80 109	3.15	234 24	9.75	24	9.75	N-2°-W	斜	(2)	1-1	II M-1	
8	206 120 138	1.72	182 30	6.07	28	6.5	N-0°-E	直			I N-24	
9	232 62 114	3.74	220 32	6.88	30	7.33	N-9°-W	斜	2	1-1	I P-23	
10	220 116 115	1.90	194 52	3.73	38	5.11	N-12°-E	直			I M-20	焼石2 石2
11	206 (148) 112	1.39	(170 56)	3.04	56	3.04	N-15°-E	直	2	1-1	I J-18	石1
12	221 104 156	2.13	(188 79)	2.38	48	3.92	N-5°-W	斜			I M-17	
13	289 175 120	1.65	(221 62)	3.56	52	4.25	N-3°-W	斜	3	1-1-1	I M-17	土器片・石 多量
14	240 141 104	1.70	(192 60)	3.2	58	3.31	N-83°-E	平	3	1-1-1	I L-14	焼石8 石5 石點
15	212 (66) 120	3.21	174 (28)	6.21	(28)	6.21	N-87°-W	斜	(2)	1-1	I N-13	
16	362 74 128	4.89	(331 14)	23.64	(11)	30.0	N-2°-W	直			I Q-16	
17	266 70 114	3.8	260 46	5.65	44	5.91	N-4°-W	直	2	2-1	I Q-20	
18	256 144 110	1.78	(240 50)	4.8	38	6.32	N-6°-W	直	(2)	1-	I S-19	
19	220 103 136	2.14	(180 30)	6	28	6.43	N-62°-W	斜	2	1-2	I T-17	石片1点
20	250 72 110	3.47	(187 34)	5.5	32	5.84	N-17°-E	直	3	2-1-1	I S-15	
21	(127) (66) (96)		(126 27)		(17)		N-35°-E	直			I T-12	
22	(75) (64) (54)		(54 60)				N-30°-W	斜	(1)	-1	I U-12	
23	236 88 80	2.68	202 72	2.81	48	4.21	N-29°-E	直			I X-15	刀子片1
24	(93) (78) (66)		(72 66)				N-41°-E	直	(1)	1-	I X-23	

(単位 cm)

番号	位置	長径×短径×深さ	平面形
1	I F-20	14 × 11 × 44	円形
2	I F-19	22 × 9 × 36	楕円形
3	I G-19	23 × 23 × 14	円形
4	I G-20	24 × 24 × 14	円形
5	I H-20	22 × 16 × 52	円形
6	I E-22	22 × 22 × 12	円形
7	I E-22	18 × 15 × 28	方形

番号	位置	長径×短径×深さ	平面形
8	I F-22II	22 × 12 × 26	方形
9	I F-22	13 × 8 × 32	円形
10	I G-23	16 × 12 × 34	円形
11	II F-0	22 × 10 × 28	円形
12	II F-1	14 × 14 × 31	円形
13	II E-3	16 × 16 × 72	円形
14	II F-4	8 × 8 × 30	方形

(単位 cm)

第3表 土坑・ピット計測表

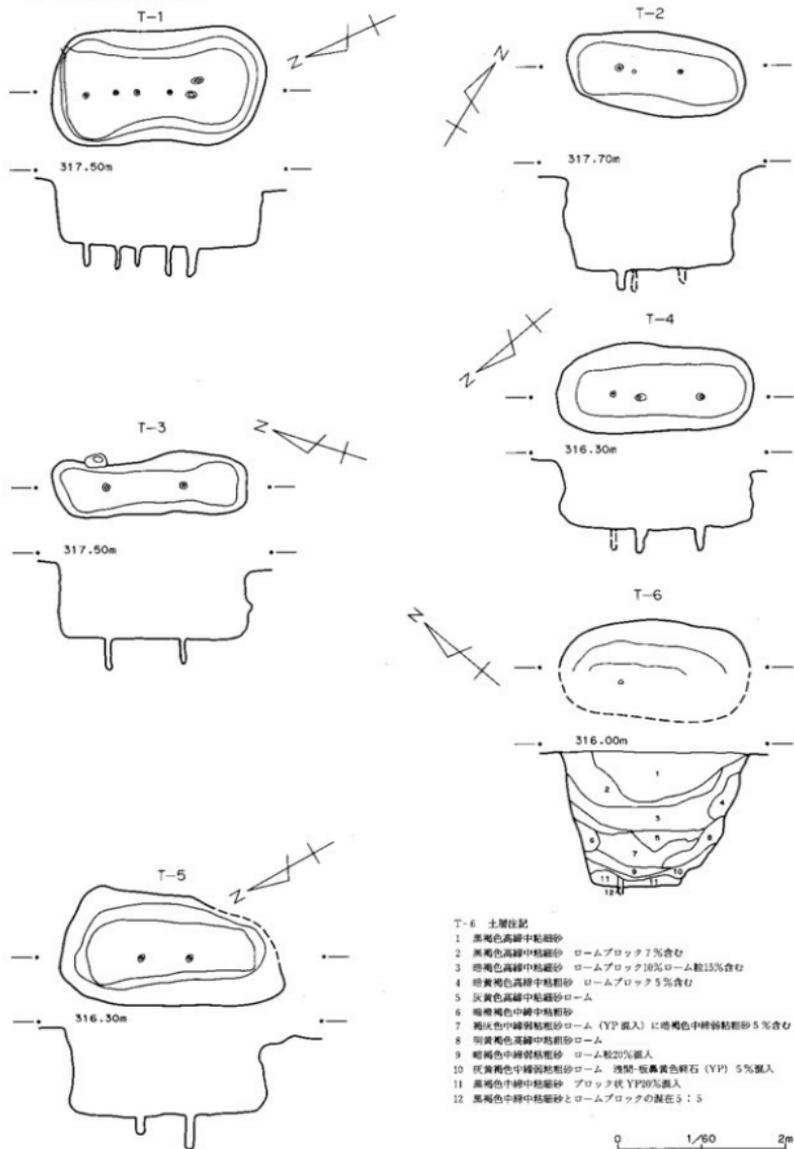
土坑番号	位 置 グリッド	法 量 (cm) (長径×短径×深さ)	平面形	備 考
D-1	II F-2	90 × 80 × 18	円 形	
D-2	II F-0	57 × 46 × 9	円 形	
D-3	I G-23	100 × 86 × 29	円 形	
D-4	I H-21	100 × 78 × 31	楕円形	
D-5	I I-21	124 × 94 × 83	楕円形	
D-6	I L-20	110 × 96 × 20	円 形	焼け石1点出土
D-7	I L-17	116 × 88 × 67	楕円形	土器片1点出土
D-8	I L-15	152 × 148 × 133	円 形	土器片1点 底部に微量の炭化物
D-9	I M-13	134 × 116 × 43	円 形	上面から土器片出土
D-10	I N-13	78 × 66 × 67	円 形	
D-11	I Q-17	204 × 124 × 80	方形か	
D-12	I Q-24	168 × 140 × 114	方形か	
D-13	II U-20	58 × 47 × 73	方形か	
D-14	I V-16	80 × 40 × 42	方 形	
D-15	III H-6	(132) × (76) × 76	方形か	
D-16	III H-6	120 × 108 × 53	方 形	
D-17	III H-7	128 × 93 × 27	方 形	
D-18	III H-8	114 × 99 × 26	方 形	
D-19	III I-8	132 × 120 × 62	方 形	
D-20	III K-21	98 × 69 × 15	方 形	
D-21	III L-21	286 × 128 × 28	方 形	天目茶碗 善伊出土
D-22	III N-21	140 × 80 × 29	楕円形	
D-23	III N-18	132 × 106 × 44	方 形	
D-24	III Q-15	114 × 76 × 17	方 形	
D-25	III Q-15	120 × 48 × 13	方 形	
D-26	III Q-13	152 × 72 × 11	方 形	
D-27	III V-14	180 × (120) × 47	方 形	
D-28	III V-16	(154) × 130 × 96	長円形	石靴 他

(単位 cm)

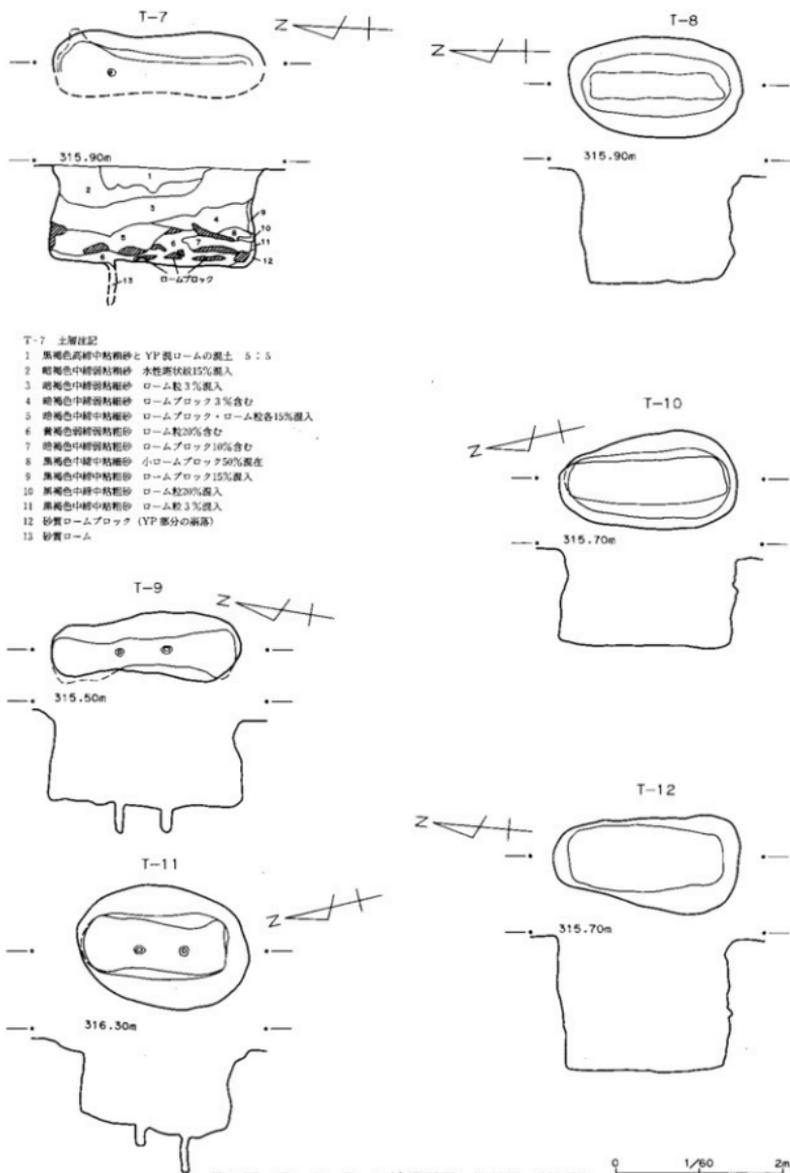
ピット 番 号	位 置 グリッド	法 量 (cm) (長径×短径×深さ)	平面形	備 考
P-1	III I-7	36 × 30 × 48	円 形	
P-2	III I-8	38 × 31 × 39	円 形	
P-3	III V-14	50 × 39 × 32	円 形	
P-4	III V-14	36 × 32 × 45	円 形	
P-5	III V-17	33 × 26 × 40	円 形	
P-6	III V-17	39 × 36 × 66	円 形	
P-7	III W-17	38 × 38 × 50	円 形	五輪塔 出土

(単位 cm)

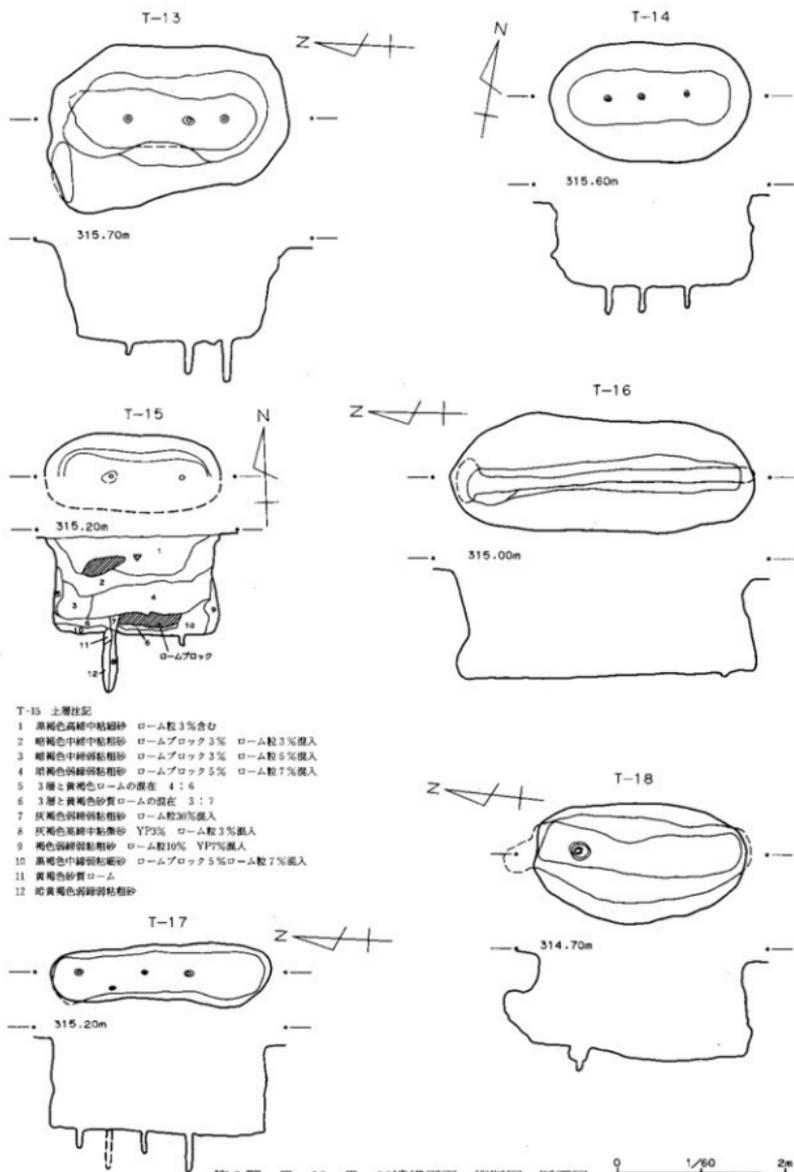
III 検出された遺構と遺物



第3図 T-1~T-6 遺構平面・縦断面図・断面図



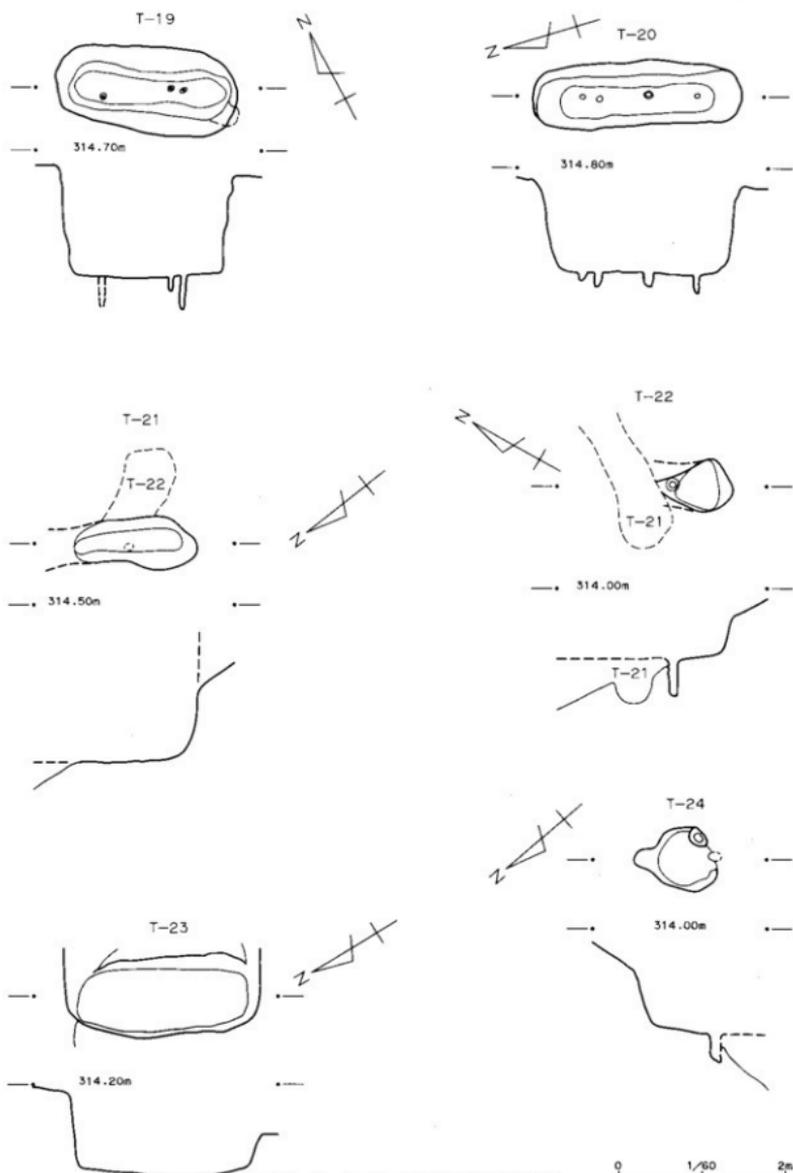
### III 検出された遺構と遺物



#### T-15 土層仕記

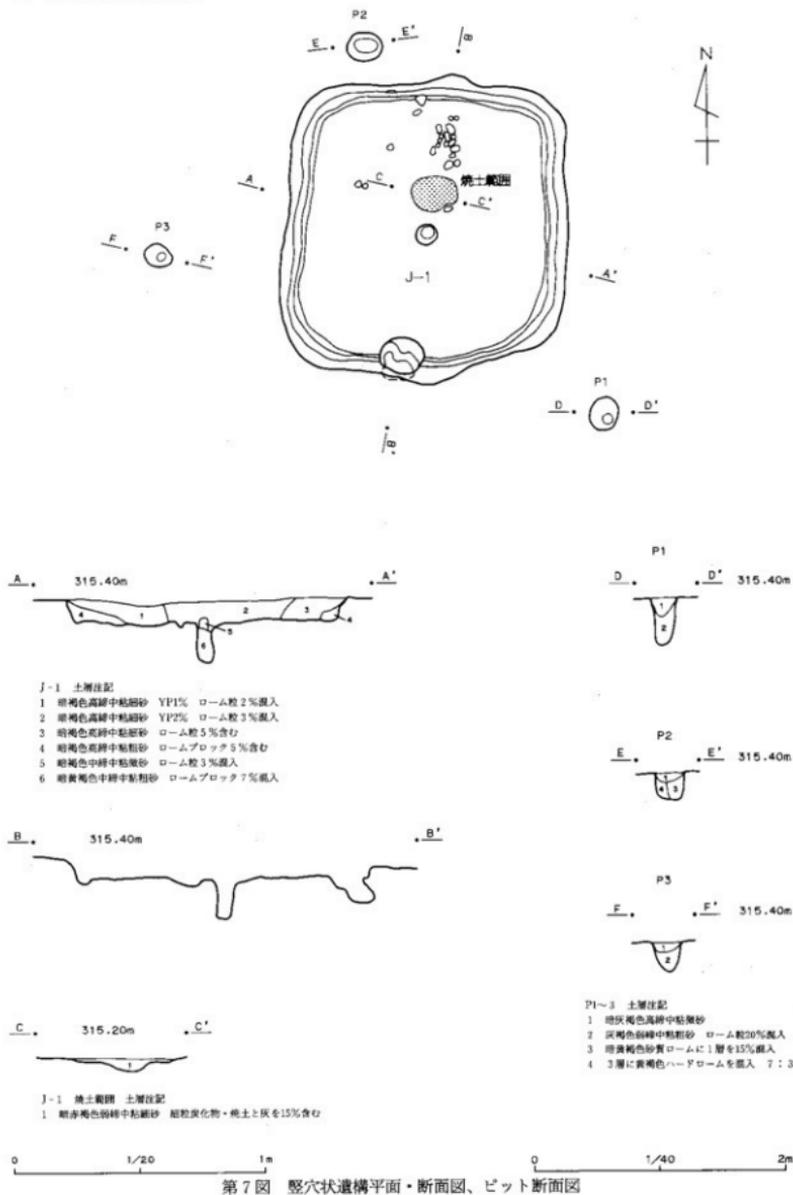
- 1 黒褐色高粘中粘細砂 ローム粒3%含む
- 2 暗褐色中粘中粘粗砂 ロームブロック3% ローム粒3%混入
- 3 暗褐色中粘弱粘粗砂 ロームブロック3% ローム粒5%混入
- 4 暗褐色弱粘弱粘粗砂 ロームブロック5% ローム粒7%混入
- 5 3層と黄褐色ロームの厚さ 4:6
- 6 3層と黄褐色砂質ロームの厚さ 3:7
- 7 灰褐色弱粘弱粘粗砂 ローム粒30%混入
- 8 灰褐色高粘中粘粗砂 YP3% ローム粒3%混入
- 9 褐色弱粘弱粘粗砂 ローム粒10% YP7%混入
- 10 黒褐色中粘弱粘粗砂 ロームブロック5%ローム粒7%混入
- 11 黄褐色砂質ローム
- 12 暗黄褐色弱粘弱粘粗砂

第5図 T-13~T-18遺構平面・縦断面・断面図

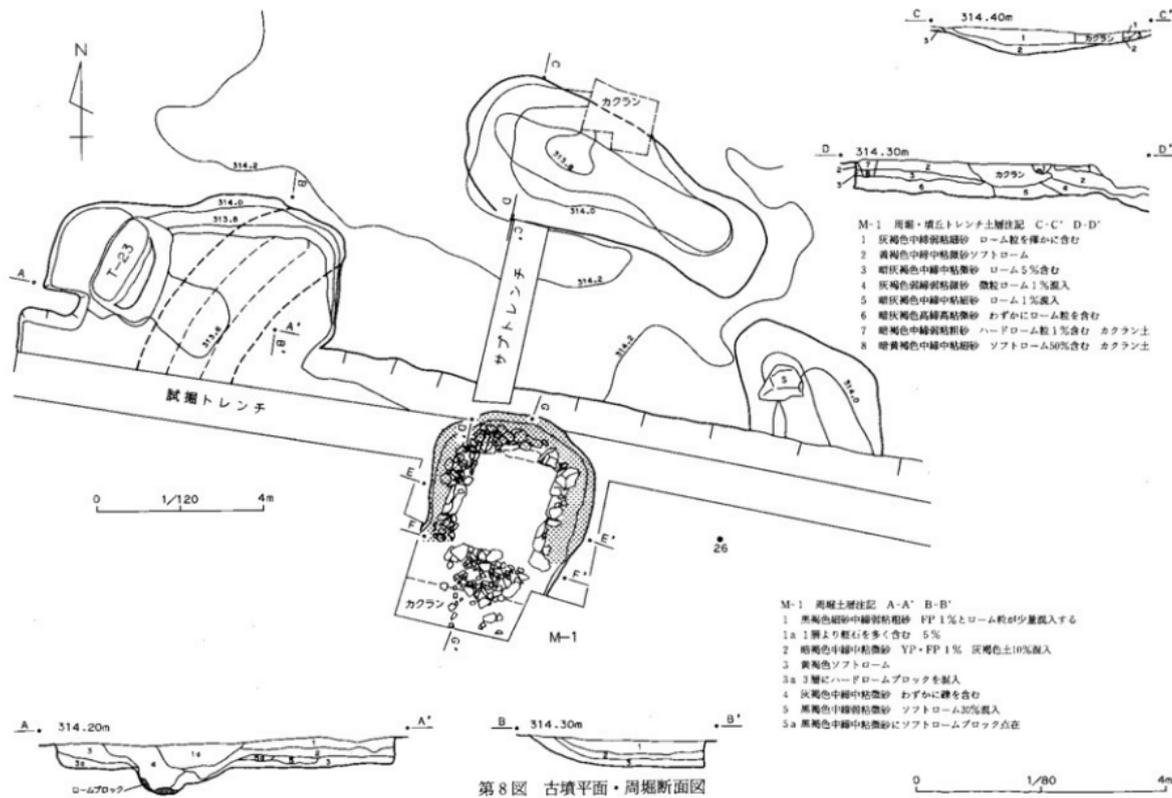


第6図 T-19~T-24遺構平面・縦断面

III 検出された遺構と遺物



第7図 竪穴状遺構平面・断面図、ピット断面図

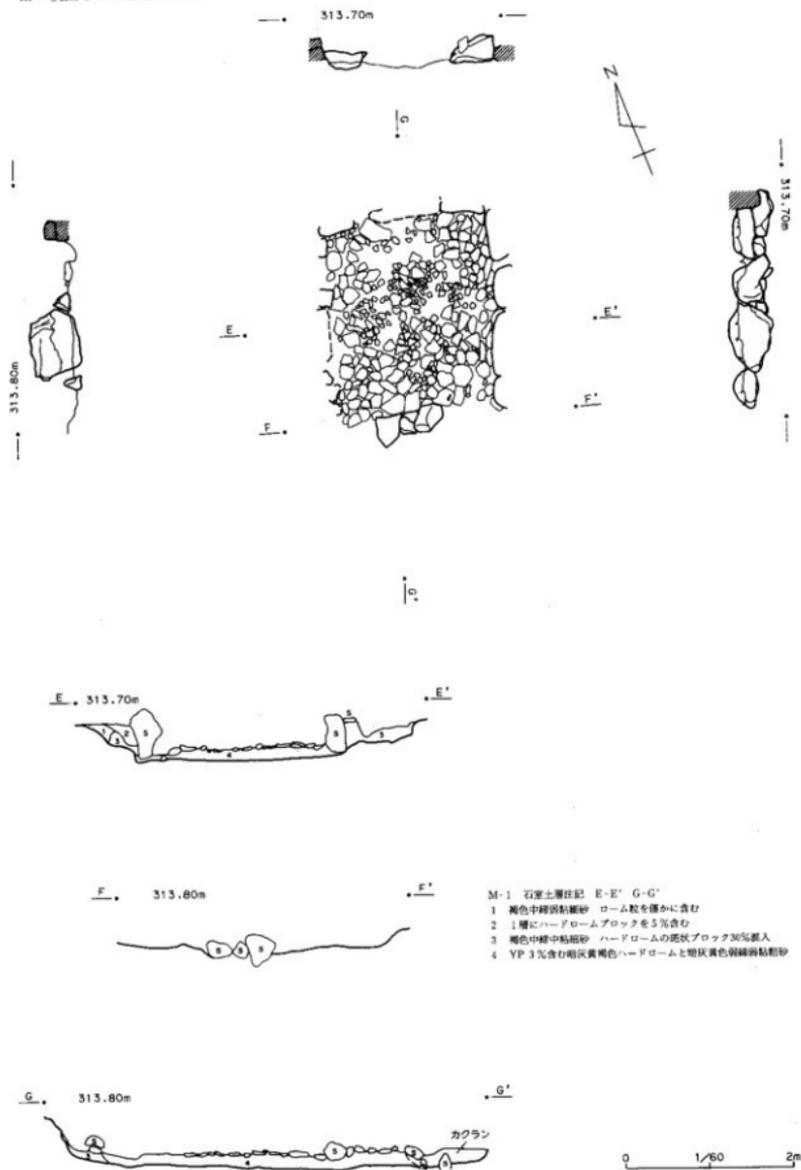


- M-1 周堀・墳丘トレンチ土層注記 C-C' D-D'
- 1 灰褐色中締硬粘砂 rome粒を僅かに含む
  - 2 黄褐色中締中粘砂 ソフトrome
  - 3 暗灰褐色中締中粘砂 rome 5%含む
  - 4 灰褐色硬粘砂 微粒rome 1%混入
  - 5 暗灰褐色中締中粘砂 rome 1%混入
  - 6 暗灰褐色高粘砂 わずかにrome粒を含む
  - 7 暗褐色中締硬粘砂 ハードrome粒1%含む カクラン土
  - 8 暗黄褐色中締中粘砂 ソフトrome50%含む カクラン土

- M-1 周堀土層注記 A-A' B-B'
- 1 灰褐色細砂中締粘砂 FP 1%とrome粒が少量混入する
  - 1a 1層より粒石を多く含む 5%
  - 2 暗褐色中締中粘砂 YP・FP 1% 灰褐色土10%混入
  - 3 黄褐色ソフトrome
  - 3a 3層にハードromeブロックを混入
  - 4 灰褐色中締中粘砂 わずかに礫を含む
  - 5 黄褐色中締粘砂 ソフトrome20%混入
  - 5a 黄褐色中締中粘砂にソフトromeブロック点

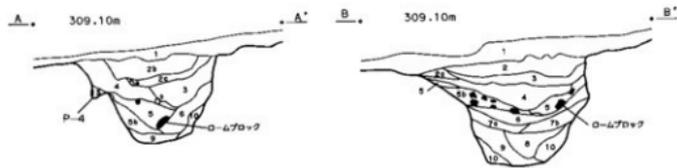
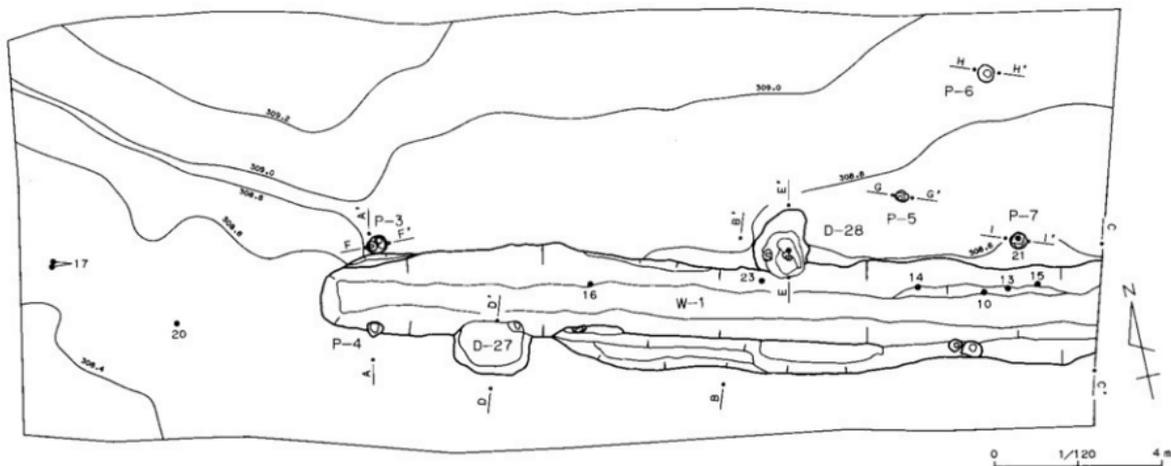
第8図 古墳平面・周堀断面図

III 検出された遺構と遺物



- M-1 石室土層柱記 E-E' G-G'
- 1 褐色中練炭粘結砂 ローム粒を僅かに含む
  - 2 1層にハードロームブロックを5瓦含む
  - 3 褐色中練中粘結砂 ハードロームの形状ブロック30%混入
  - 4 YP 3瓦含む暗灰黄褐色ハードロームと暗灰黄色粘結粘結砂

第9図 石室平面・展開図・断面図



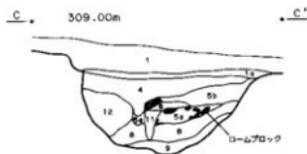
W-1 ベルト地断土層柱記 A-A' B-B'

- 1 耕作土
- 2 灰褐色弱粘軟粘砂
- 2a 灰褐色弱粘軟粘砂
- 2b 灰褐色弱粘軟粘砂 ローム数10%と黒褐色土の混入
- 3 2bより細かいローム粒を1%含みこぶし大の石が入る
- 3a 暗褐色弱粘軟粘砂 灰褐色細砂を50%ずつ含む CP 3%混入
- 4 暗褐色中粘軟粘砂 ソフトローム5%混入
- 5 黄褐色ハードロームブロックを70%と4層60%混入
- 5b 5層より4層を多く含む ハードロームブロック10%
- 6 暗褐色中粘中粘粗砂 ソフトロームを5%含む
- 7a 黄褐色中粘中粘粗砂 ソフトロームを70%含む
- 7b 7aより粗く、ソフトローム40%と暗褐色細砂60% 7aより砂質度高い
- 8 黄褐色弱粘軟粘砂 ソフトロームブロックをわずかに含む
- 9 黄褐色弱粘軟粘砂 ソフトローム粒10%混入 8層より砂粒を多い
- 10 明褐色弱粘軟粘砂 ハードローム70%とソフトローム30%混入
- 13 黒褐色弱粘軟粘粗砂 2mmφ粒のロームを1%含む

第10図 W-1平面・断面図

0 1/60 2m

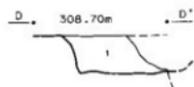
### III 検出された遺構と遺物



W-1 家壁土層注記 C-C'

- 1 耕作土
- 1a 1層にローム粒をわずかに含む灰褐色細砂 (表土)
- 4 暗褐色細砂質粘細砂 ソフトローム5%混入
- 5a 黄褐色ハードロームブロックを70%と4層が30%入る
- 5b 5aより4層を多く含むハードロームブロック10%
- 6 暗褐色中細半粘細砂 ソフトローム5%含む
- 8 黄褐色弱粘中粘細砂 ソフトロームブロックをわずかに含む
- 9 黄褐色弱粘中粘細砂 ソフトローム粒が10%混入り8層より砂粒やや細かい
- 11 灰黄褐色弱粘細砂 ローム粒をわずかに含む
- 12 褐色弱粘細砂 浅間系の軽石 (肌色) がわずかに入る

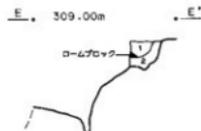
D-27



D-27 土層注記

- 1 灰褐色中細弱粘細砂 ロームブロック5% 小礫(2~3mmφ)1%を混入

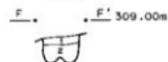
D-28



D-28 土層注記

- 1 褐色弱粘細砂質粗砂
- 2 暗褐色弱粘細砂 ロームをやや含む

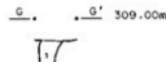
P-3



P-3 土層注記

- 1 灰褐色弱粘細砂 浅間C軽石(CP)1%含む
- 2 黄褐色中細弱粘細砂 ソフトローム50%ハードロームを僅かに含む

P-5



P-5 土層注記

- 1 褐色弱粘細砂 ローム粒を1%含む

P-6

H-H' 309.20m



P-6 土層注記

- 1 暗褐色弱粘細砂 ローム粒10%含む

P-7

I-I' 309.00m

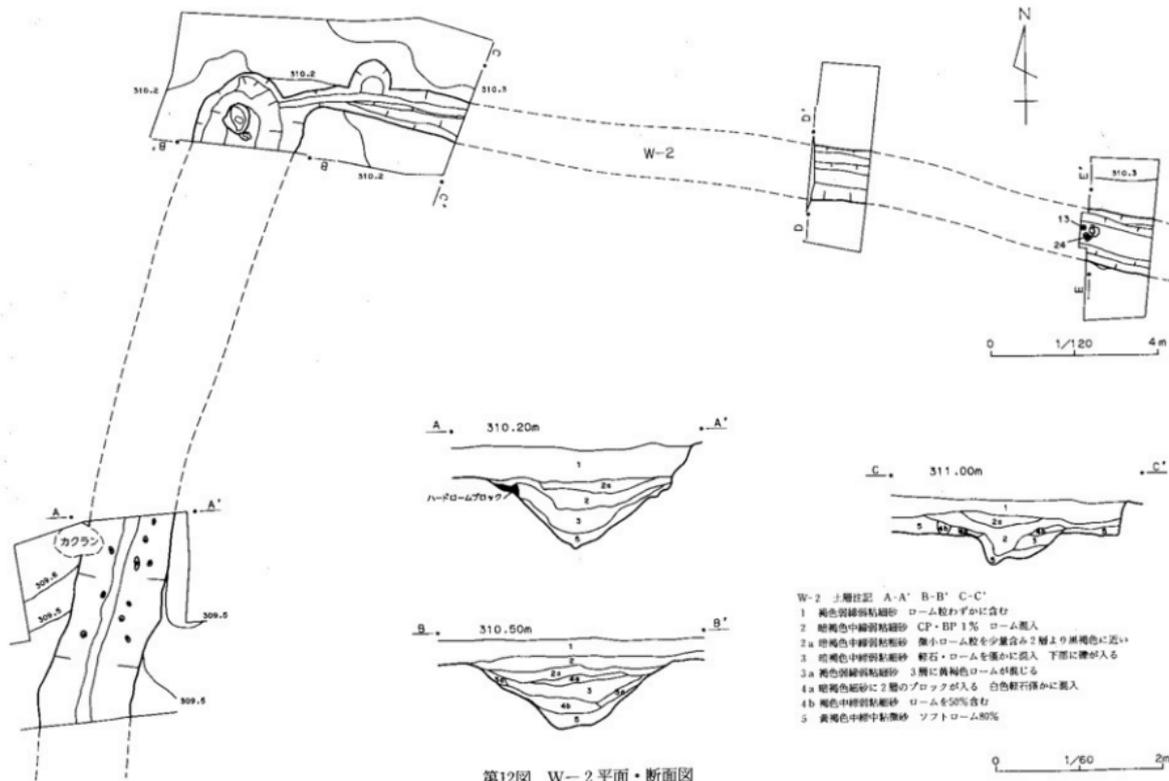


P-7 土層注記

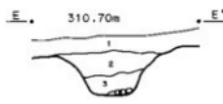
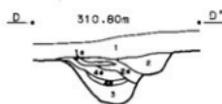
- 1 暗褐色弱粘細砂 ローム粒(2~3mmφ)を10%含む

0 1/50 2m

第11図 W-1、土坑、ピット断面図



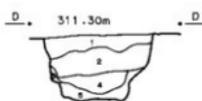
### III 検出された遺構と遺物



W-2 土層注記 D-D' E-E'

- 1 褐色弱粘質粘砂 ローム粒わずかに含む
- 1a カクランのため黄土が入り込む
- 2 暗褐色中細弱粘砂 CP・BP 1% ローム混入
- 2a 暗褐色中細弱粘砂 微小ローム粒を少量含み2層より黒褐色に近い
- 3 暗褐色中細弱粘砂 軽石・ロームを僅かに混入 下部に障が入る
- 4a 暗褐色細砂に2層のブロックが入る 白色軽石層かに混入
- 4b 褐色中細弱粘砂 ロームを5%含む

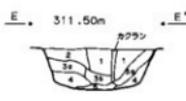
D-15



D-15 土層注記

- 1 灰褐色中細粘砂
- 2 暗灰褐色弱粘質粘砂 ロームを僅かに含む
- 3 暗灰褐色細砂にハードロームブロック10%混入
- 4 上記1黄褐色中細弱粘砂
- ハードローム粒1% ソフトロームが多く混じる
- 5 灰褐色細砂とハードロームの混在 7:3

D-16



D-16 土層注記

- 1 褐色中細粘砂
- 2 灰褐色中細粘砂 ローム粒を5%含む
- 3a 暗褐色中細粘砂 ローム粒を僅かに含む
- 3b 3a層より細まりが強くローム粒を3%含む
- 4 暗灰褐色中細粘砂 ハードローム粒を混入する
- 5 4層とハードロームブロックの混在

D-17



D-17 土層注記

- 1 灰褐色弱粘質粘砂
- 2 灰褐色中細粘砂 ローム粒を5%含む
- 3 暗褐色弱粘質粘砂 ロームブロックを僅かに含む

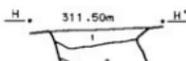
D-18



D-18 土層注記

- 1 灰褐色弱粘質粘砂 ローム粒を僅かに含む
- 2 灰褐色弱粘質粘砂 ロームブロック (10mm φ 粒) を5%含む
- 3 黄褐色中細粘砂 ロームブロックを多く含む

D-19

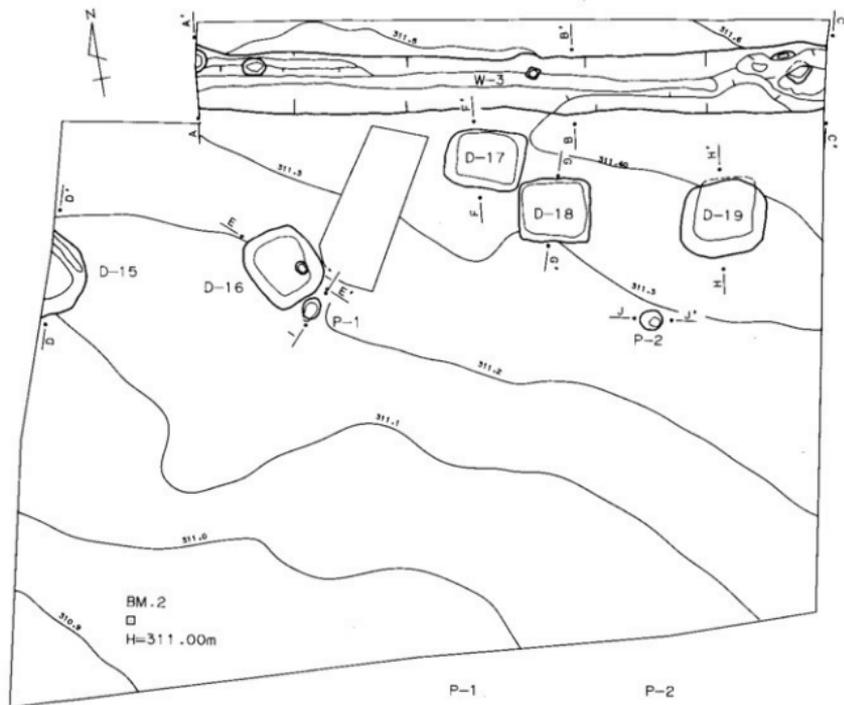


D-19 土層注記

- 1 暗灰褐色中細弱粘砂 白色軽石1% 小礫 (1~3mm φ) を僅かに含む
- 2 暗褐色中細粘砂 ロームと小礫 (5~10mm φ) 1%含む
- 3 暗褐色中細弱粘砂 ローム粒5%ハードロームブロックを含む

0 1/60 2m

第13図 W-2、土坑断面図



A. 312.20m A'



B. 311.60m B'



C. 312.10m C'



W-3 土層柱記 A-A' B-B' C-C'

- 1 新作土
- 2 暗褐色弱輝面粘細砂 ローム粒1%含む
- 3 暗褐色弱輝面粘細砂 礫を含みローム粒層中に散在
- 4 暗褐色土とハードロームの存在 7:3

P-1

P-2

I I' 311.20m

J J' 311.50m



P-2 土層柱記

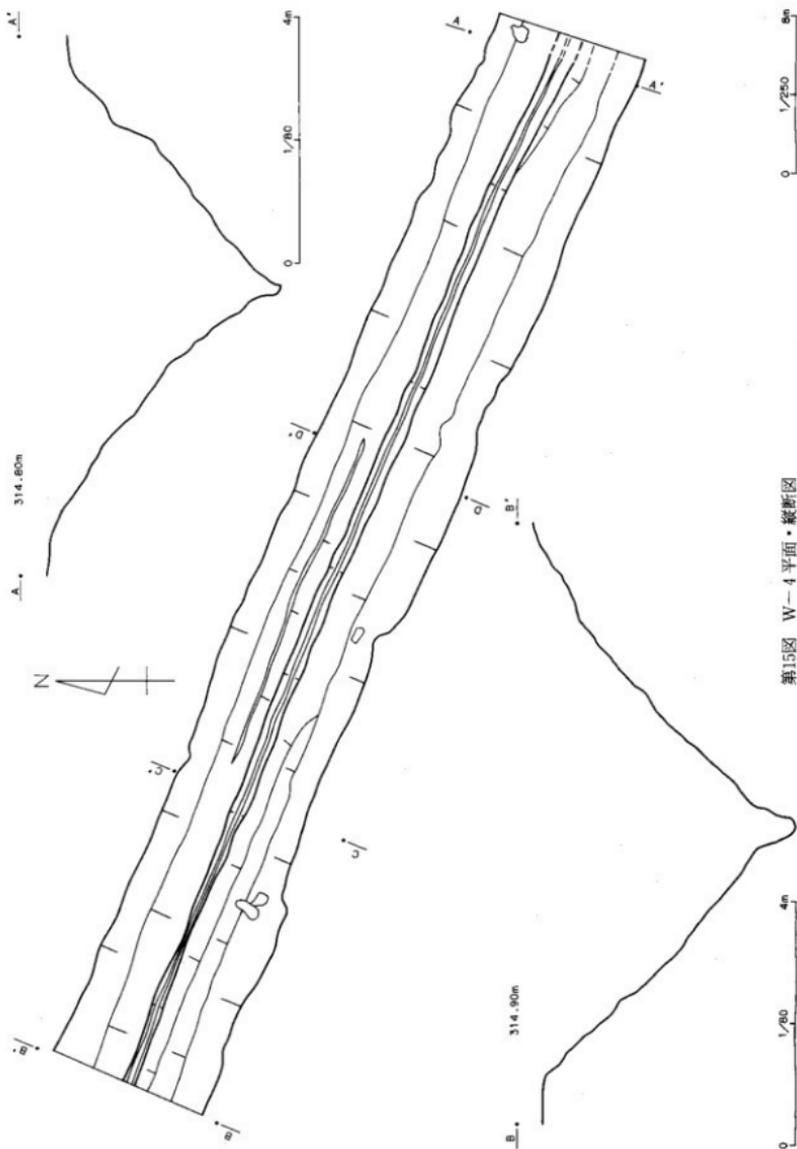
- 1 暗褐色弱輝面粘細砂 ローム1%含む
- 2 1層とハードロームの表土 7:3

第14図 W-3平面・断面、ピット断面図

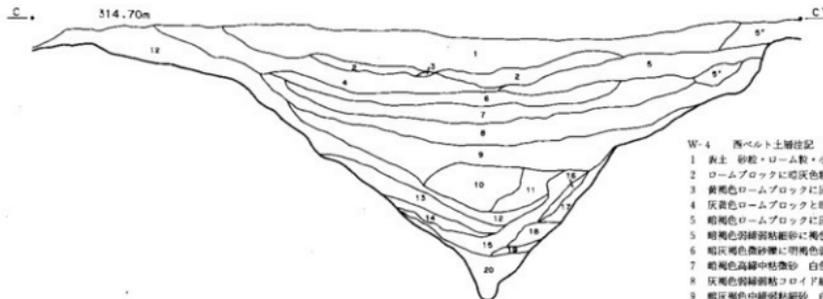
0 1/60 2m

0 1/80 4m

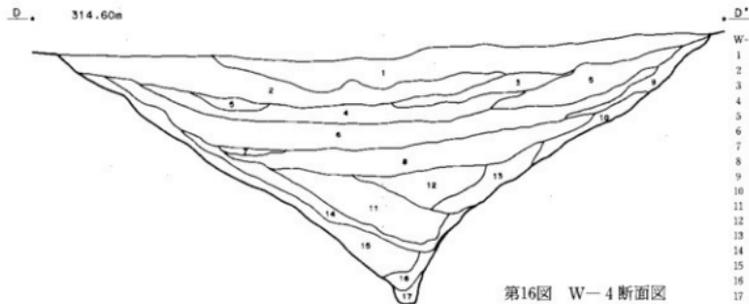
III 検出された遺構と遺物



第15図 W-4 平面・縦断面



- W-4 西ベルト土層注記 C-C'
- 1 表土 砂粒・ローム粒・小礫を含む
  - 2 ロームブロックに暗灰色粘粒20%含む
  - 3 暗褐色ロームブロックに灰色粘粒5%含む
  - 4 灰青色ロームブロックと暗灰色粘粒の混在 4:7
  - 5 暗褐色ロームブロックに灰色粘粒混在
  - 6 暗褐色粘粒粘結細砂に褐色ロームブロック30%含む
  - 7 暗褐色高粘中粘微砂 白色・褐色パリスを僅かに含む 上層に暗褐色中粘中粘微砂の水溶性鹽類あり
  - 8 灰褐色粘粒粘結コロイド細砂 白色・褐色パリスを僅かに含む 5mmφ以下の小礫2%含む
  - 9 暗褐色中粘粘結細砂 白色・褐色パリスを僅かに含む 8層より大きい小礫15%含む
  - 10 灰褐色粘粒粘結コロイド細砂 ローム粒20% 1cm前後の小礫を3% 暗灰色砂を30%含む
  - 11 黄色パリスを7%含むロームブロックに黒灰色粘粒粘結微砂を15%含む
  - 12 褐色パリスを3%含む中粘中粘微砂に11層を10%含む
  - 13 12層と14層の混在 5:5
  - 14 浅緑・白赤紅石 (Se) を10%含む暗褐色中粘中粘粗砂ローム
  - 15 褐色・黄色パリスを7%含む暗褐色中粘中粘細砂ロームに灰褐色粘粒粘結微砂を30%含む
  - 16 褐色パリスを30%含む暗褐色ロームに灰褐色粘粒粘結微砂を20%含む
  - 17 12層に暗褐色粘粒粘結コロイド粗砂を20%含む
  - 18 褐色・黄色パリスを10%含む暗褐色中粘中粘粗砂ロームに暗褐色粘粒粘結微砂を15%含む
  - 19 黄色パリスを7%含む暗褐色ロームブロックと暗褐色粘粒粘結微砂の混在 5:5混入
  - 20 暗褐色粘粒中粘微砂ローム(褐色パリス3%混入)と暗褐色粘粒粘結コロイド細砂の5:5

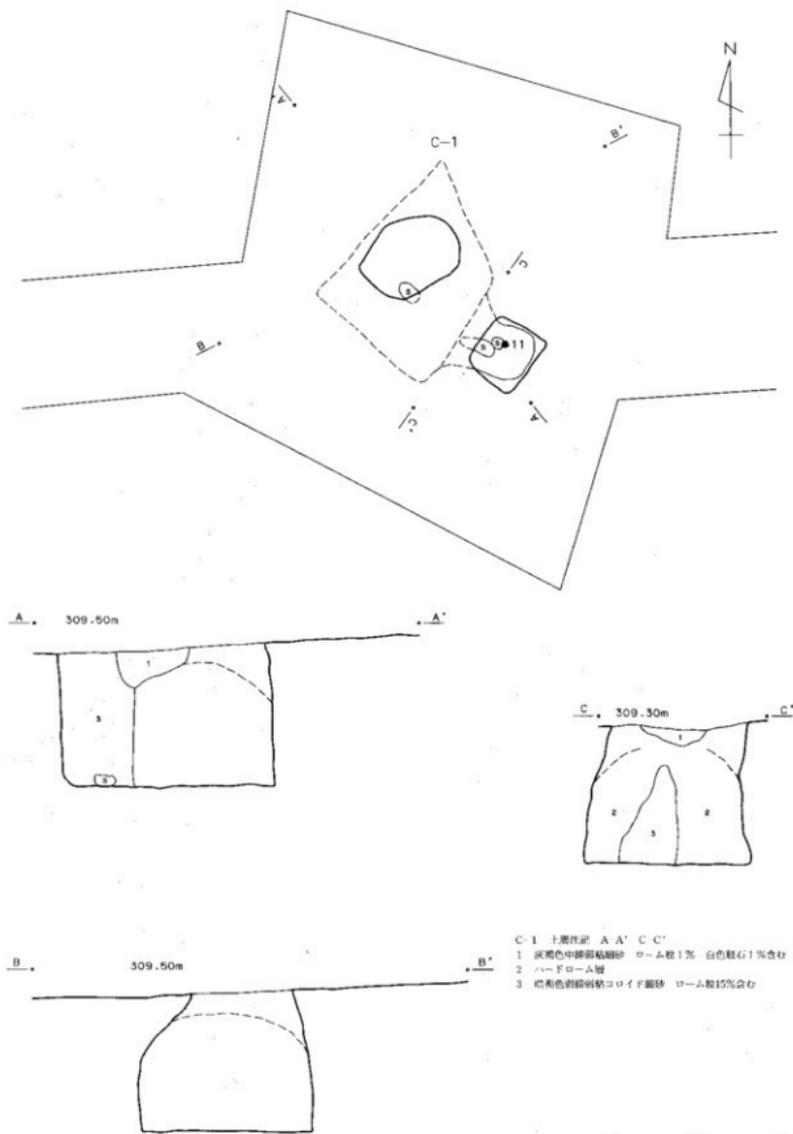


- W-4 東ベルト土層注記 D-D'
- 1 暗褐色粘粒粘結細砂 ロームブロック50%混入 水性砂30%混入
  - 2 暗灰色粘粒粘結細砂 浅緑・赤褐色紅石 (Rt) 3% スコリア・ロームブロック3%混入
  - 3 暗褐色粘粒粘結微砂 BP 3% スコリア15%混入
  - 4 暗褐色粘粒粘結細砂 BP 3%混入
  - 5 暗褐色中粘粘結コロイド細砂 ロームブロック7%混入
  - 6 黄色粘粒粘結細砂 BP 3%混入
  - 7 暗褐色粘粒粘結細砂 ロームブロック20% 小礫 5%混入
  - 8 暗褐色粘粒中粘微砂 微小ローム粒3%小礫3%混入
  - 9 暗灰色粘粒粘結細砂 BP 5%ソフトローム15%含む
  - 10 灰黄色中粘中粘粗砂 浅緑・赤褐色紅石 (Yt) 15% スコリア15%含む
  - 11 暗褐色粘粒中粘微砂 小礫3% ロームブロック20%混入
  - 12 暗オリブ褐色中粘粘結細砂 小礫2%混入
  - 13 暗灰色中粘粘結細砂 ロームブロック3%混入
  - 14 暗褐色中粘中粘微砂 小礫3% ロームブロック20%混入
  - 15 暗褐色中粘中粘微砂 YP 3%混入
  - 16 暗褐色粘粒粘結細砂 微灰白色砂 7%含む
  - 17 暗褐色中粘粘結粗砂 7%含む

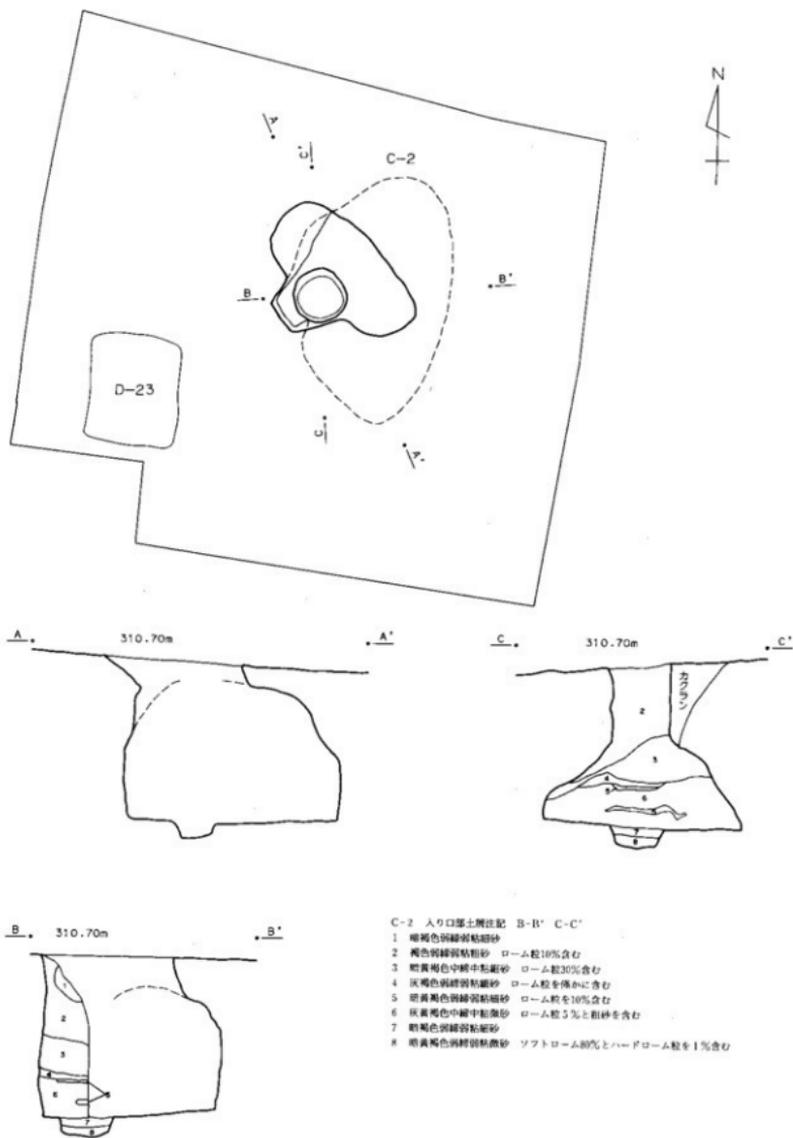
第16図 W-4 断面図

0 1/60 2m

III 検出された遺構と遺物



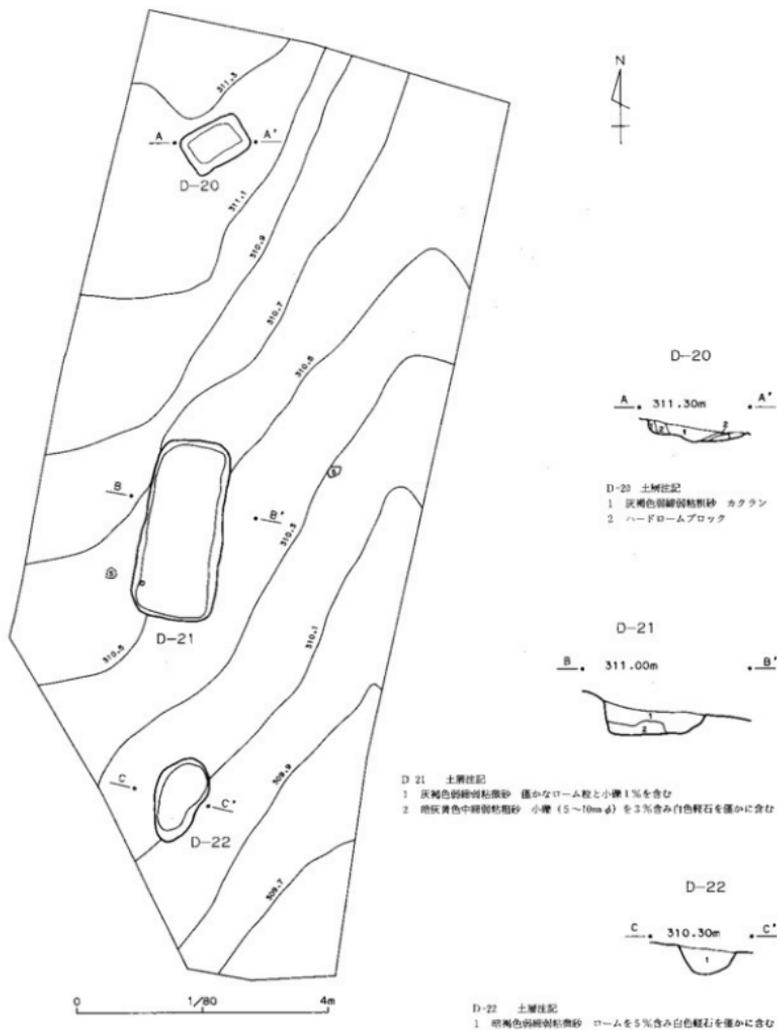
第17図 1号地下式土坑平面・断面図



第18図 2号地下式土坑平面・断面図

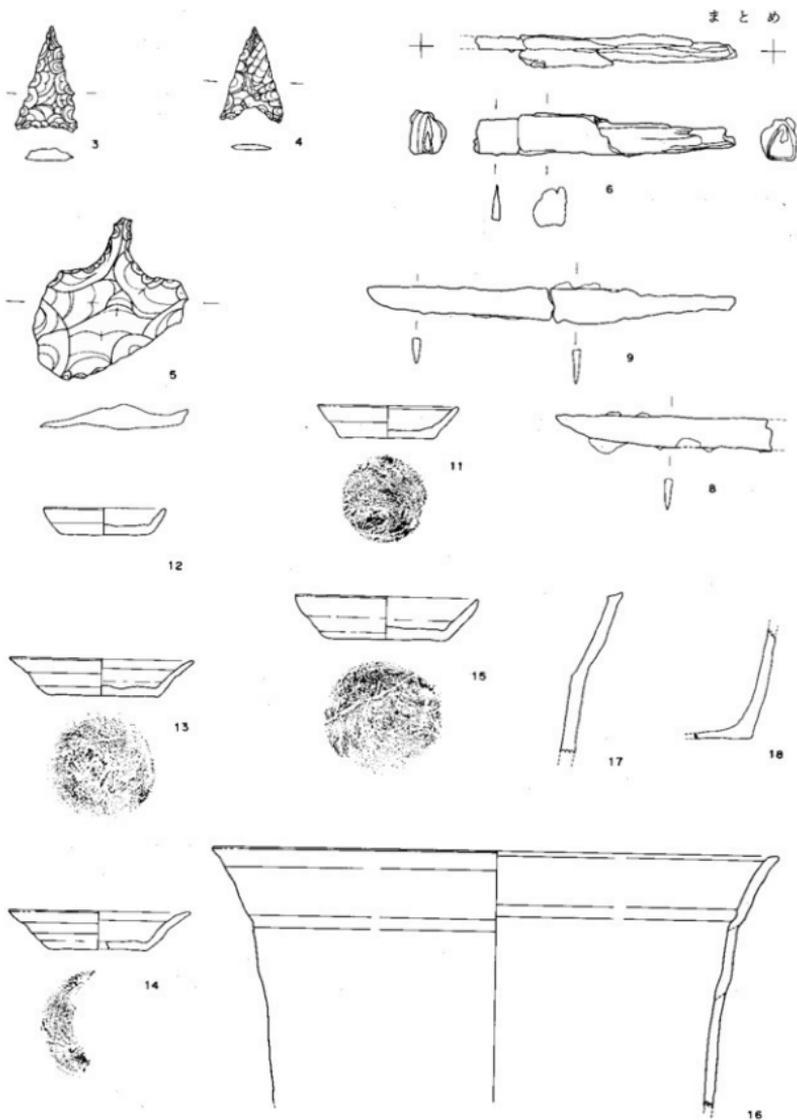
0 1/60 2m

III 検出された遺構と遺物



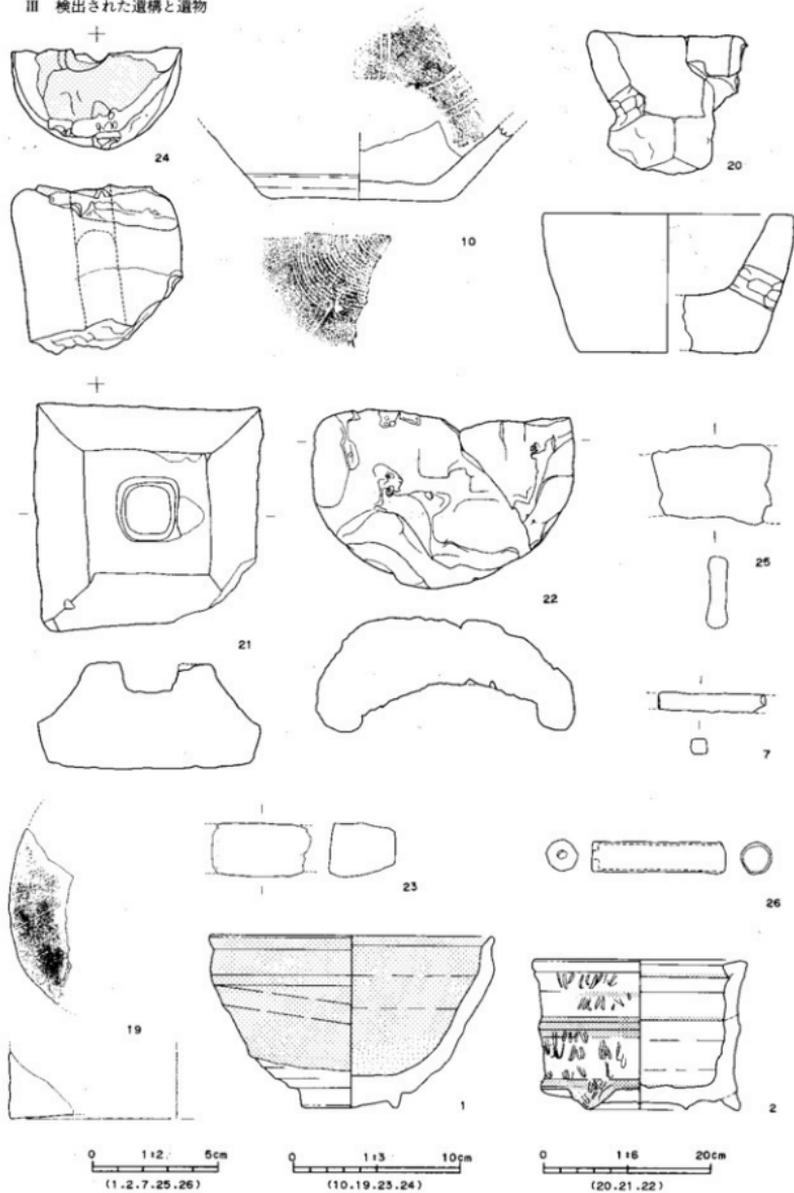
第19図 土坑(墓坑)平面・断面図

0 1/80 2m



第20図 遺物実測図一 1

III 検出された遺構と遺物



第21図 遺物実測図-2

# 写真図版



遺跡全景（空中撮影）



1号陥し穴完掘



2号陥し穴完掘



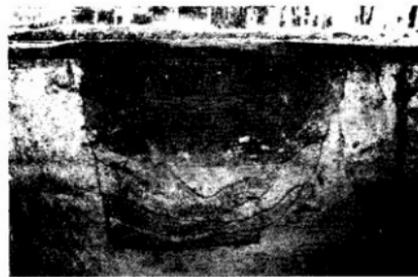
3号陥し穴完掘



4号陥し穴完掘



5号陥し穴完掘



6号陥し穴半截地断



7号陥し穴半載地断



8号陥し穴完掘



9号陥し穴完掘



10号陥し穴完掘



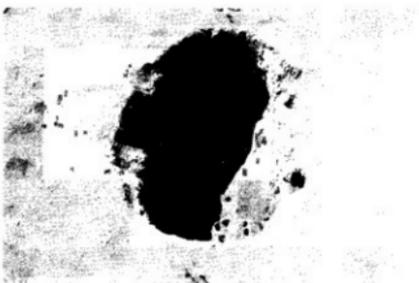
11号陥し穴完掘



12号陥し穴完掘



13号陥し穴完掘



14号陥し穴完掘



15号陥し穴半截地断



16号陥し穴完掘



17号陥し穴完掘



18号陥し穴完掘



19号陥し穴完掘



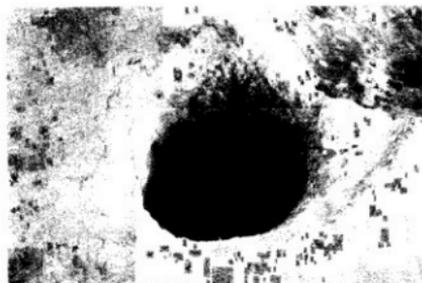
18号陥し穴逆茂木痕



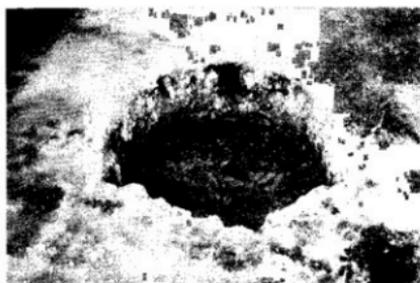
20号陥し穴完掘



7号土坑完掘



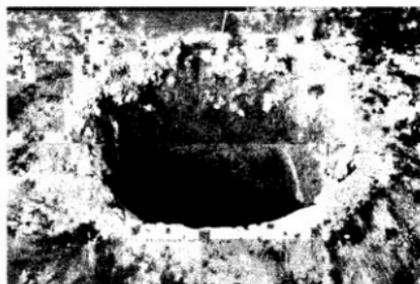
8号土坑完掘



9号土坑完掘



11号土坑完掘



12号土坑完掘



竪穴状遺構（南から）



古墳石室全景（南から）



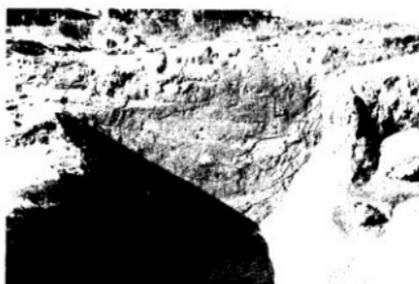
玄室残存状況（北から）



主体部掘り方（南から）



W-1 全景 (東から)



W-1 中央部地断 (東から)



W-2 屈曲部 (西から)



W-2 地断 (北から)



W-3 完掘 (西から)



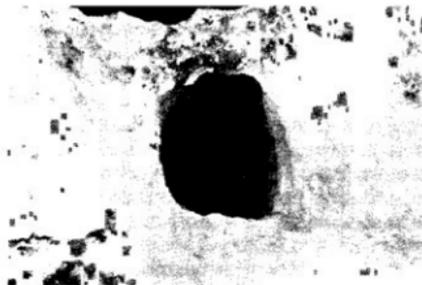
18号土坑完掘



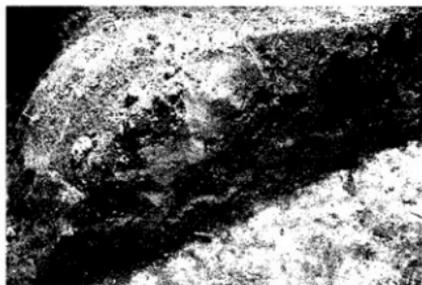
W-4 全景 (西から)



W-4 西半部



1号地下式土坑入り口部



1号地下式土坑内部構造



1号地下式土坑完掘



2号地下式土坑確認面



2号地下式土坑内部構造



2号地下式土坑底面状況



2号地下式土坑入り口部



21号土坑完掘



天目茶碗 遺物番号 1



香炉 遺物番号 2



茶臼断片 遺物番号19



擂鉢 遺物番号10



石鉢 遺物番号20



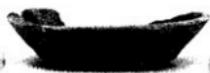
土鍋 遺物番号17



土鍋 遺物番号16



土鍋 遺物番号18



灯明皿 遺物番号11



坏 遺物番号13



坏 遺物番号15



灯明皿 遺物番号12



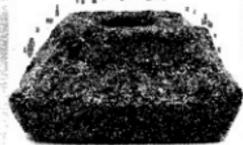
坏 遺物番号14



砥石 遺物番号23



蓋石 遺物番号22



火輪 遺物番号21



礮羽口 遺物番号24



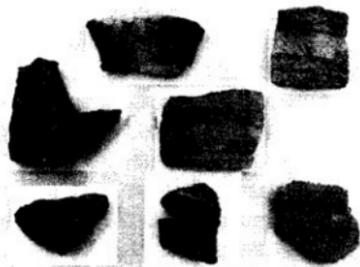
古墳出土遺物 遺物番号8、9、6 (上から)



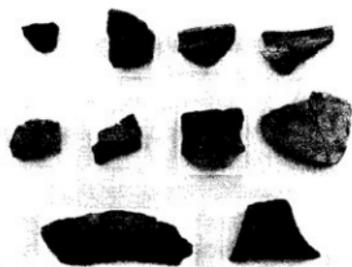
一括出土鉄製品



出土石鏃・石匙



縄文時代土器片



縄文時代土器片

## 発掘調査報告書抄録

フリガナ	コグレキタクケチイセキ
書名	小暮北受地遺跡
副書名	寺院建立に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	群馬県富士見村遺跡調査会報告書
シリーズ番号	
編著者名	新保一美（スナガ環境調設株式会社）
発行機関	群馬県富士見村遺跡調査会（群馬県富士見村教育委員会）
発行機関所在地	〒371-0114 群馬県勢多郡富士見村大字田島866-1
発行年月日	西暦1998年6月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
コグレキタクケチイセキ 小暮北受地遺跡	セセボンフジミムラ 勢多郡富士見村 大字小暮		KGKU	36°27'08"	136°07'01"	19971203 19980327	5,560㎡	民間開発行為 (寺院建立)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
小暮北受地遺跡	土坑	縄文時代	陥し穴	24基	土器片		
〃	竪穴状遺構	縄文時代	竪穴住居跡	1基	土器片		
〃	古墳	古墳時代	古墳	1基	刀子	2点	
〃	土坑	中世	墓坑	2基	天目茶碗	1客	
〃					香炉	1基	
〃	土坑	中世	地下式土坑	2基	灯明皿		
〃	城館址	中世	溝・堀	4条	土鍋、羽口、火輪、石鉢		

## 小暮北受地遺跡

---

1998年6月25日 印刷

1998年6月30日 発行

発行／群馬県富士見村遺跡調査会  
勢多郡富士見村大字山島866-1番地

編集／スナガ環境測設株式会社  
前橋市青柳町211番地-1

印刷／朝日印刷工業株式会社

---